

三省堂 高校英語教育

2013年 夏号

巻頭エッセイ

PISA型読解力 北川達夫 …… 1

特集

「新教科書 2」—これからの英語教育

- 『CROWN English Communication I・II』の編集を終えて 霜崎 實 …… 2
- 『MY WAY English Communication I・II』の特長—題材・言語材料・言語活動・教科書構成— 森住 衛 …… 5
- 『VISTA English Communication I・II』の編集方針と内容 金子朝子 …… 8
- 『CROWN English Expression I・II』の編集にあたって 松原好次 …… 11
- 『MY WAY English Expression I・II』の編集方針—英語のしぐみを学び、論理的な表現力を養う— 飯田 毅 …… 14
- 『SELECT English Expression I』の基本方針と内容紹介—意欲を起こさせる教科書をめざして— 井上 徹 …… 17
- 『SELECT English Conversation』の編集方針と内容 北出 亮 …… 20
- 『CROWN PLUS Level 3・4 New Edition』の特色 山本史郎 …… 23
- 「読むこと」と「書くこと」を接続した授業の展開を考える 浅井智雄 …… 24
- 入試探訪[英語]: 素材と設問から学ぶ—高校入試と大学入試の相関— 平井正朗 …… 28

2013年度センター試験の分析と対応 渡辺 聡 …… 32

アリゾナ便り 依田里花 …… 表紙裏

表紙写真について 岩佐洋一 …… 表紙裏



Petrified Forest National Park

—化石の森国立公園

明治大学 依田里花

『化石の森に行きたいな…』という一言に、『あら、じゃ、行きましょう、明日』と言って、夢を現実へと導いてくれたのは私の友だちだった。

『化石の森』は、Robert E. Sherwood (ロバート・E・シャーウッド、1896 - 1955) というアメリカ文学史上に名を残す劇作家が、1936年にブロードウェイで上演した戯曲の題名で、映画化もされて今もDVDで楽しめる作品である。その『化石の森』の舞台となった場所が、実際に、「化石の森国立公園」という名前でもアメリカのアリゾナ州北東部に存在しているのだ。

「化石の森」というのは、文字通り、化石となった木々が大地に横たわる森…ならぬ砂漠である。なぜ、木が朽ちず、炭化もせず、化石になったのかを素人なりに単純化してみると次のようになる。時はこの地帯が熱帯に位置していた頃のこと。雨季の洪水によってなぎ倒された巨木群が濁流とともに押し流されて、やがて河床に留まった。そこへ遙か西方からの火山灰が砂とともに堆積するなど条件が相まって、大きな丸太がそのまま化石となって残った…ということらしい。中には、側面や断面がツルツルとして色とりどりの宝石のように美しい切り株もある。そのような2億年以上も前の化石が、およそ885km²の赤や紫の層を織りなす乾いた丘陵の谷間や大地に、ゴロンゴロンと「転がって」いるのだ。

ロバート・E・シャーウッドがこの地を訪れたのは、国際情勢に暗雲が漂う1934年のことであった。第一次世界大戦の従軍経験がある作者にとって、叡智を携えたは



ずの人類が同じ過ちを繰り返すことは、栄華の末に自ら滅びる選択をするに等しいものであった。化石の森に文明社会が重ね合わさって映ったのは言うまでもない。レスリー・ハワード演じる知識人のアランと、ハンフリー・ボガード演じる無法者デュークの対決を描き、世界がどこへ向かうのかを問うた作品は、このようにして誕生したのであった。国立公園のパフレットには、「過去と現在のあらゆるものと人類をつなぐ、無限の知識と経験の宝庫」とある。園内を縦断する43キロの一本道を走りながら、2億数千万年の時を経た自然の驚異に、改めて人間の営みを思った。

往復2千キロを超える3泊4日の行程で、「化石の森」に居られたのは僅か半日と短い時間であったが、帰国する直前に叶った夢のような思い出は、今も色鮮やかに宝の化石となって心の中に生きている。



表紙写真
について

サンチャゴ巡礼路

麻布高等学校 岩佐洋一

サンチャゴ・デ・コンポステーラは、世界遺産にも登録されているスペイン北西部の町である。聖ヤコブの墓があることから、ローマ、エルサレムと並ぶキリスト教3大聖地の一つに数えられており、中世よりヨーロッパ中から巡礼者を集めてきた。四国88か所巡礼路は輪廻のように巡回しているが、サンチャゴ巡礼路はこの町が終点であり、そこに向かういくつかの経路がある。そのひとつ、ピレネー山脈からの約800kmの行程は、巡礼路自体が世界遺産に認定されたこともあり、近年多くの巡礼者、旅行者でにぎわっている。

この写真は、その巡礼路の道中に位置するBodegas Irache というワイナリーにある「お接待」の蛇口である。蛇口のホタテ貝はサンチャゴ巡礼の象徴だ。十字架上のCamino de Santiagoはサンチャゴ巡礼路を意味し、Vinoはワイン、Aguaは水、蛇口は無料でひねることができる。ここでは誰でもワインが好きで、しかもただで飲むことができるのだ。

酒好きの方には、ぜひ彼の地を訪れてもらいたい。巡礼と聞くと敷居が高く思われるが、実は全くそんなことはな

い。スペインは物価も安いし、食事もおいしい。世界に名だたるリオハワインも格安でがぶ飲み状態だ。巡礼路上にはアルベルゲという巡礼宿が充実しており、宿泊の心配は無用だ。寝てシャワーを浴びるだけの場所がほとんどだが、一晚5〜10ユーロほどで泊まれる。食事も多くのレストランで立派なセットメニューが8〜12ユーロほどで楽しめる。しかもワイン付きだ。リオハをはじめとするワイン産地ではだいたいフルボトル1本が付いてくる。毎日歩き通しの日々に、この毎晩のワインは私の体にしみ込み、本当に疲れを癒してくれた。

さて、この写真のワインの味だが、実はあまり印象に残っていない。スペインに来る前からここは期待していたのだが、この地を通過したのが朝だったこともあり、酒、ことに「ただ酒」にはだらしのない私も、さすがに飲む気にはなれなかった。少しでも荷を軽くするため、ボトルに詰めることもしなかった。その晩泊まったアルベルゲで食事を共にしたオランダ人がペットボトルにこのワインを詰めており、そのご相伴に預かっただけだ。「さすがオランダ人、go Dutchの国だけに肩に食い込むザックの重さに耐え、ただ酒をよくぞ持ち帰ったぞ！」と感心しながら口にしたり、彼は自転車巡礼者で、ワインはザックではなくサイドバッグで運んだそうだ。

PISA 型読解力

日本教育大学院大学 北川達夫



私は、OECD（経済協力開発機構）が2009年に実施したPISA（学習到達度調査）において、読解力調査の専門委員として問題の作成と評価に携わった。言語も文化も異なる、約70ヶ国の生徒の読解力を、同一の問題で測定することは可能なのだろうか？当初は半信半疑だった。だが、各国の委員と議論を重ねつつ問題を作成するうちに、疑問は氷解していった。本文を、まずは文字通り正確に読む。文脈にそって、明確には書かれていない背景を推論する——読解の基本は、世界中どこでも同じだからだ。ただ、そこに「異質性」という要素を、常に意識できるかどうか、グローバルな世界を背景としたPISA読解力調査の特色だった。

ここで、中学時代の英語の授業を思い出す。サイドリーダーの物語文を読むのだが、30年以上前のことだから、生徒が一文ずつ順繰りに和訳する古典的なスタイルだった。迫り来る殺し屋に対して、主人公が命ごいをしている場面である。

生徒A『「お前を殺してやるぞ」と、殺し屋が言いました』

生徒B『「どうぞ！」』

ここで教室は笑いに包まれた。「殺してやるぞ」と言われて、「どうぞ」と命ごいする人間など、いるはずもないからだ。生徒Bは「Please!」という主人公の言葉を、文脈を考慮することなく和訳してしまったのである。「どうか、助けてください」とでも意識すればよかっただろうに……。

ただ、当時、想像力だけは豊かだった私は、「殺してやるぞ」と言われて、「どうぞ」と答えるような状況も、世の中にはありうるだろうな、などと勝手に想像していた。たとえば、自分が進んで犠

牲になることで、誰かを助けようとしているような状況、あるいは殺し屋に対して、主人公が何らかの負い目を感じているような状況——などなど。もちろん、この物語の文脈では、当然の推論として、そのようなことはありえないのだが。

やや極端な事例ではあるが、PISAの読解力では、こういった視点が必要である。同じ語句でも、文脈が異なれば正反対の意味になりうる。文脈にそって解釈（推論）するといっても、そこには自分の信念や価値観、知識や経験が大きく影響していること。だから、自分と他者の解釈が異なる時、「他者はなぜそう考えたのか」と考えると同時に、「自分はなぜそう考えたのか」と考えなければならない。先述の事例にしても、「どうぞ」という和訳を間違いとして排除することよりも、なぜそのような解釈に至ったのかを考えることのほうが重要なのである。あらゆる「違い」（事実誤認によるものさえ含めて）を「異質性」として受け止め、俯瞰的にとらえることこそ、PISA読解力調査の求める、中核的な能力といえるだろう。

OECDは、グローバルな世界を生き抜くためには、異質な社会集団（heterogeneous group）と共存し、さらには協働する能力が肝要であるとしている。そのためにはまず、あらゆる異質性を受け止め（ただし、受け入れる必要はない）、俯瞰して考える能力が必要である。そして、異質性を踏まえて、自分のとるべき言動を判断する能力が必要なのである。

こういった能力を測定するのが、OECDのPISA読解力調査である。そして、こういった能力を育成するのが、これからの英語科教育であるべきではないだろうか。

特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『CROWN English Communication I・II』 の編集を終えて



慶應義塾大学 霜崎 實

はじめに

学習指導要領の改訂を受けて、いよいよ今年度から「コミュニケーション英語Ⅰ」が始まり、来年度からは「コミュニケーション英語Ⅱ」が始まる。新学習指導要領では、科目名の変更、語彙の増強、質量面での充実など、重要な改訂項目が明記されている。さらに、基本的には英語で授業を行うことが想定されるなど、高校での英語授業風景も大きく変わることが予想される。ここでは、新学習指導要領の特記すべき点について説明し、今回編集を終えた『CROWN English Communication I・II』の編集方針とその概要について述べてみたい。

教科書観の転換

はじめに、新学習指導要領では、「質量面での格段の充実」が求められているという点について触れておきたい。語彙を例にとれば、これまでは中学(900語)と高校(1,300語)を合わせて2,200語であったが、改訂後は中学(1,200語)と高校(1,800語)を合わせて3,000語となり、大幅の増加となる。もちろん、質量面での格段の充実は、語彙だけでなく、レッスン数の増加や総ページ数の増加にも反映されている。

しかし、ここで注意しておきたいのが、同時に教科書観の見直しが要求されているということである。新指導要領によれば、「教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである」という教科書観から脱皮して、むしろ「個々の児童生徒の理解に応じた指導の充実に資する教科書」、「児童生徒の学ぶ意欲の向上に資する教科書」、「児童生徒の自学自習に資する教科書」といった教科書観への転換が求められている。こうした転換は、現場での授業のありかたの転換を要求するものであり、端的に言え

ば、「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」ことがこれまで以上に求められることになったとも言える。

これを受けて、今回の『CROWN I, II』では、選択教材を大幅に増やすことによって、「質量面での格段の充実」という要請に応えることとした。例えば、本課に加えて、Optional Readingを載せたのは、こうした教科書観の転換に対応するための工夫の一つである。

英語での授業

新学習指導要領では、科目名も「コミュニケーション英語」に変更され、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と明記されている。しかし、ここで誤解して欲しくないのは、すべての授業活動を英語で行うことが要請されているわけではない、ということである。例えば、文法事項を英語で指導することまで求められているわけではないし、教師が一方的に英語で講義をすることが求められているわけでもない。指導要領の趣旨は、英語によるディスカッションや発表など、積極的なコミュニケーション活動への取り組みがこれまで以上に推奨される、ということだと思われる。

その一方で、「コミュニケーション英語」は、単なる英会話とは一線を画すものでなければならぬ。したがって、基本教材としての英文については、多岐に渡るテーマについて、生徒の思考力や知的好奇心に訴えるような内容を持っていることが必須条件である。それをもとに、様々なコミュニケーション活動を展開する工夫を組み込むことが教科書に求められていると考える。いかにして英語での授業を円滑に進めるのかについては、現場での創意工夫が

求められるところであるが、今回編集したTeachers' Manualでは、授業プランや、レッスンへの導入方法など、具体的な提案を盛り込んでいるので、ぜひご参考にしていただきたい。

題材のテーマと概要

本課で取り上げた題材のテーマは、言語・芸術・科学・環境・遺跡発掘・動物の知性・格差社会・情報化社会・平和・生き方など、多岐にわたっている。まず、『CROWN I』で取り上げたテーマとレッスンの概要を示す。

本課は10レッスンから構成されているが、星印(*)を付した第6課、第8課、第10課は、現行版か

らの継続レッスンとした。現場からの強い要望に応えるためである。Reading教材2篇は、生徒が楽しめるユーモアに富んだ作品を選択した。また、Optional Lesson(選択教材)としてキング牧師とオバマ大統領の夢を語った“Two Dreamers, One Dream”を導入した。

次に、『CROWN II』で取り上げたテーマとレッスンの概要は以下の通りである。

基本的な構成は、『CROWN I』と同様である。本課のうち「国境なき医師団」を取り扱った第4課のみが継続レッスンとなっている。Reading教材の一つはユーモア短編、もう一つは感動的な実話である。

『CROWN English Communication I』

レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1	Going into Space	[科学・生き方] 若田光一氏が国際宇宙ステーションでの活動経験や宇宙開発の意味について語る。
Lesson 2	A Forest in the Sea	[環境問題] 東京湾のゴミの埋め立て地を緑化することによって、「海の森」を実現しようとするプロジェクトを紹介する。
Lesson 3	Writers without Borders	[言語・国際性] 言語や文化の境界線を越えて活躍する3人の女流作家の体験から、新しい言語を学ぶことについて考える。
Lesson 4	Playing by Ear	[音楽・若者の生き方] ピアニストとして活躍する辻井伸行氏の体験を通じて、音楽による感動について考える。
Lesson 5	Food Bank	[格差社会・NPO] 貧困に苦しむ人々に食料が行きわたる仕組みを作ったチャールズ・マクジルトン氏の活動を紹介します。
Reading 1	Wisdom of a Fool	[ユーモア] 中世のトルコに実在したとされるムラ・ナスルディンを主人公とするユーモアに富んだ小説を読む。
Lesson 6*	Roots & Shoots	[環境教育・動物] ジェーン・グドール氏がチンパンジーの習性・人間との類似性・環境教育について語る。
Lesson 7	Diving into History	[歴史・遺跡発掘] アレクサンドリアの海底遺跡の発掘に成功した考古学者フランク・ゴディオ氏の考え方を紹介します。
Lesson 8*	Not So Long Ago	[平和・歴史] 20世紀を写真で振り返りつつ、戦争と平和について考える。
Lesson 9	Paddling a Log?	[情報化社会] 情報が氾濫するインターネット社会において、情報をどのように扱ったらよいのかについて考える。
Lesson 10*	Good Ol' Charlie Brown	[生き方・価値観] チャールズ・シュルツ氏の作品を通して、生きるうえで何が大切かを考える。
Reading 2	The Luncheon	[ユーモア] サマーセット・モームのユーモアに富んだ古典的な短編を読む。
Optional Lesson	Two Dreamers, One Dream	[自由・平等・平和] 公民権運動の指導者キング牧師とオバマ大統領の自由・平等・平和についての考え方を紹介します。

『CROWN English Communication II』

レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1	A Boy and His Windmill	[貧困・創意工夫] 電気・水道のないアフリカのマラウィの少年が、自力で風力発電機を製作した実話を紹介する。
Lesson 2	Into Unknown Territory	[将棋・創造性] 将棋界の第一人者である羽生善治氏の将棋に対する考え方を通じて、「勝つ」ことよりも大切なことについて考える。
Lesson 3	Paul the Prophet	[スポーツ・予知能力] 2010年のサッカー・ワールドカップでの勝敗を的確に予測したポールの話から、予知能力について考える。
Lesson 4*	Crossing the Border	[医療・国際協力] 日本人として初めて国境なき医師団に参加した戸貫朋子氏が、医療援助の経験と若者へのメッセージを語る。
Lesson 5	Txting	[情報化社会・言語] 携帯電話などで使われるユニークな英語表現を紹介するとともに、そこに見られる言語変化の兆しについて考える。
Reading 1	Sun-Powered Car	[ユーモア] 一見するとソーラー・カーのように見える車、しかしその実態は何か? ユーモア短編を英語で楽しむ。
Lesson 6	Ashura	[芸術・伝統] 美しい仏像の代表とされる興福寺の阿修羅像の魅力について、その工法、歴史、表情の謎を通して考える。
Lesson 7	Why Biomimicry?	[科学・自然] 自然の模倣によって、環境に優しいテクノロジーを生み出すことができるというbiomimicryの考え方を紹介します。
Lesson 8	Before Another 20 Minutes Goes By	[地雷・国際協力] 世界各地で多くの被害者を出し続けている地雷を除去するための活動を紹介することで、平和について考える。
Lesson 9	The Long Voyage Home	[宇宙] 小惑星探査機「はやぶさ」の宇宙の旅、小惑星イトカワから物質のサンプルを地球に持ち帰るまでの物語を紹介する。
Lesson 10	Grandfather's Letters	[家族・絵手紙] 祖父から孫たちへ送られた1,200通もの魅力的な絵手紙の発見、手紙を通じて家族の絆について考える。
Reading 2	A Fall Before Rising	[生き方] ヒマラヤで遭難し九死に一生を得たジャイクマー氏は、その経験をきっかけにして、社会貢献活動に乗り出す。
Optional Lesson	MJ	[音楽] King of Popと称されるマイケル・ジャクソン氏と、彼の音楽への取り組み方を紹介します。

各レッスンの流れ

ここでは各レッスンの構成について述べておきたい。まずタイトルページでは、Pre-reading 活動として、生徒の背景知識を活性化させる目的で、Take a Moment to Think を新設した。本課への導入として活用していただきたい。

本文は4セクションから構成され、各セクション見開き2ページとした。傍注で慣用表現を取り上げ、脚注で新語リスト、慣用表現のパラフレーズや例文を挙げるほか、本文の理解を確認するための設問を設けた。さらに、各セクションの終わりには、リスニングによる内容理解の質問も用意した。

本文の末尾には、Food for Thought を新設した。これはOECDによる国際学習到達度調査(PISA)における「読解力」育成を意識したもので、生徒が情報を取り出し、解釈し、自らの体験を踏まえて内容を理解する機会を提供することを目的としている。

Post-reading 活動として、まずComprehensionのCheckで、内容把握問題を4題用意した。続くSummaryは、本文を要約する能力を養うことを目的としたものである。ただし、単に穴埋めすることで活動が終わり、ということではない。あらかじめ生徒に自分で英文の要約を作成させ、その後で要約問題を通じて要約の仕方を学ばせるような工夫も考えられる。

Activitiesでは、本文のテーマに関連した短いダイアログを聴かせた上で、内容把握、作文、口頭のコミュニケーション活動をすることができるよう構成した。

Grammarについては、「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」で基本的な文法項目が完結するように構成した。今回新たにコラムを設けたが、文法を単なる暗記の対象とするのではなく、理解して納得することが重要であるという考え方に基づいたものである。また、学んだ文法項目を活用して、生徒が自分の体験などについて書いてみる練習も導入した。これに続くExercisesでは、Grammarで学んだことを表現活動に結びつけるための練習問題を用意した。

Optional Readingは、本文のテーマに関連した内容を扱った300語から350語程度の英文を取り上げた。本文のテーマを別の角度から扱ったもの、発展的内容を扱ったものなど、本文をより深く理解する助けとなるはずである。ただし、Optional Reading

は発展的な学習内容を含むもので、全ての学校で扱うことは必ずしも想定されていない。自学自習用の教材としての活用もありうる。

Optional Readingに関して特筆すべきは、「英語Ⅰ」の第1課および第6課のエッセイである。“Message from Koichi Wakata”は、若田光一氏ご本人から寄稿していただいたものである。英文は高校1年生にはやや難しいが、日本語訳つきで、原稿をそのまま載せることにした。“Message for High School Students”も、Goodall氏ご本人から特別に寄稿していただいたものである。この場を借りて、両氏にお礼を申し上げる次第である。

リーディング・スキルと音声の指導

従来、リーディング・スキルについては、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」では取り扱っていなかったが、今回の改訂では『CROWNⅠ』から導入することとした。特に談話標識やパラグラフの構成についての知識は、読解のみならずライティングについても重要である。

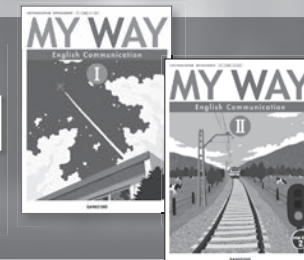
音声指導については、Sound Studioというコーナーを設け、[1] 音の連結・脱落・同化、[2] 文の区切り、[3] 強勢とリズム、[4] イントネーションに焦点を絞って、英語の音声の特徴について取り上げた。ただし、これはあくまでも発音のヒントといった位置づけであるから、より実践的な音声指導のためには、音声テープを活用していただきたい。

おわりに

以上、『CROWNⅠ,Ⅱ』の概要について述べてきたが、シリーズは2015年刊行予定の『CROWNⅢ』をもって完結することになる。こちらは、先行する2冊を受けて、さらに高度なレベルへ到達することを目標に掲げ、いわば『CROWN』シリーズの到達点を示すものになるはずである。生徒の興味関心に訴える内容を持つ点については、先行する2冊と共通しているが、論説文を含むより高度な内容を扱いはずである。高校での3年間という短期間において、中学卒業レベルから大学受験レベルに至るまで、総合的な英語コミュニケーション能力の育成のために、『CROWN English CommunicationⅠ,Ⅱ,Ⅲ』が役立つならば、CROWN編集委員一同にとって、これ以上の喜びはない。

特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『MY WAY English CommunicationⅠ・Ⅱ』の特長 — 題材・言語材料・言語活動・教科書構成 —



桜美林大学 森住 衛

はじめに

新版『MY WAYシリーズ』の「コミュニケーション英語Ⅱ」(以下、『Ⅱ』)の見本本が完成しました。この『Ⅱ』は「コミュニケーション英語Ⅰ」(以下、『Ⅰ』)に続いての刊行となります。先生方には、『Ⅱ』の2014年度使用を検討していただきたいと思いますが、『Ⅰ』の2014年度使用の場合もありますので、ここでは『Ⅰ』と『Ⅱ』を合わせて紹介します。

さて、『MY WAY』は、ご支援いただいた前版の『EXCEED』を受け継いだものですが、編集の方針は「不易流行」です。つまり、時代を超える大本を残し、時代に合わせた改訂はおこなうというものです。以下に、この不易流行に関係させながら、題材・言語材料・言語活動・教科書構成の4点にわたって説明します。

題材 — 高いメッセージ性

小・中・高・大のどのような段階でも、教科書の核になるのは本文の題材内容です。この題材内容に高校生に訴えるメッセージ性がない教科書は、「魂」がないのも同然です。この「不易」のもとに、新生『MY WAY』では、本課本文の題材を全部新しい題材に一新しました。これが現代に合わせた進化、すなわち「流行」です。『EXCEED』で好評だった題材が多々ありましたが、身を切る思いで捨てました。教材を送る側が現在の新しい問題を模索しなければ高校生の心に届かないと考えたからです。以下が、新しく約300を超す題材の候補から、テーマの種類(言語・文化・科学・環境・サブカルチャーなど)や形式(評論・エッセイ・人物伝など)、国や地域などを考慮して精選した『Ⅰ』の本課10課分の題材です。

1. A Story about Names
名前をめぐる世界の状況

2. Shoes for a Dream
日本とケニヤを結ぶ高橋尚子さんの活動
3. Green Roofs
都市生活を快適にする緑の屋根
4. Pictures of Funny Moments
エリオット・アーウィットのユニークな写真
5. Letters in the World
世界のさまざまな文字
6. Great Abilities of Pigeons
ハトの驚くべき能力とは……
7. The Power of Words
人々の心を動かすことばの力
8. A Mysterious Object from the Past
古代ギリシャの船から見つかった謎の物体
9. Sesame Street
世界中の子どもたちに愛されるテレビ番組
10. A Lecture by Maskawa Toshihide
益川敏英博士の「のりしろ」人生

次は、この春に見本本として刊行した『Ⅱ』です。

1. Pictograms
すばやく情報を伝えるピクトグラム
2. New Year's Celebrations
アジアのさまざまなお正月
3. Eco-friendly Inventions
地球にやさしい発明品
4. Brazil — Far away or Close?
ブラジル — 遠くて近い国
5. Eye Contact
目で伝えるコミュニケーション
6. Space Elevator
エレベータで宇宙の旅へ
7. An Encouraging Song
歌がくれた勇気と希望

8. Language Contacts

文化の出会いとはことばの出会い

9. Charles Chaplin

喜劇王と言われたチャップリンの半生

10. The Five-story Pagoda of Horyuji

五重塔が倒れない理由

さらに、各課のあとには〈Optional Reading〉として、その課で取り上げた内容に関係する題材を1ページ分(約150語)配置して、テーマの深化や拡大を図りました。これは現場の先生方の要望に合わせた「流行」ともいえます。これを加えますと、『I』『II』とも本課が各10課分、そして〈Optional Reading〉が10回で、計20の題材に接することになります。なおこの他に、以下の物語教材を『I』で1つ、『II』で2つ配置しています。

I The Girl in the Bank

ある女性銀行員におこった出来事とは…

II The Cat

ある日ネコが出会ったのは…

A Letter to Italy

本当の運命の相手とは…

言語材料 — 文法と語彙の増強

『EXCEED』は、これまで語彙と文法を重視してきました。『MY WAY』もこの「不易」を踏襲しています。古今東西言われてきていますように、「語学はやはり語彙と文法」です。この2つがしっかりと身につけていけば、実践的コミュニケーションにも大学受験にも役立ちます。しばしば日本人は英語を話せないとか、最近では大学新入生のレベルが落ちたなどと言われていますが、原因はこの2つの貧困にあるのです。新版『MY WAY』はこの2つの説明や練習を以下のように質量ともに増やして強化しました。〈Starter〉の文法の説明や課と課の間の〈Vocabulary Building〉は新版の「流行」にあたります。次に、『I』の内容を紹介します。

(1) 文法：基礎から発展までの多彩な扱い

・〈Starter〉(教科書冒頭)

本課に入る前に基本事項の確認、品詞の簡便な説明など、教科書では初めての試み

・〈Grammar〉(各セクション)

丁寧なワンポイントの説明

・〈Exercise〉(各課末)

その課に出ている文法の固め

・〈文法のまとめ〉(2課ごと)

2課分の主要な文法項目の復習

・〈基本項目一覧表〉(巻末付録)

〈文型・文法一覧表〉(巻末付録)

本教科書で扱った文法項目のまとめとわかりやすい解説

(2) 語彙：語彙力増進のための工夫

・〈Words〉(各課末)

語彙を増やすためのクイズ/ゲーム形式の問題

・〈Vocabulary Building〉①-④(2課ごと)

品詞の区別、基本動詞の意味、接頭辞、接尾辞

・〈基本項目一覧表〉(巻末付録)

動詞の変化形など中学から高校までの語彙の

総合的把握

言語活動 — Reading & Thinkingの充実

言語活動は、「5技能(4技能+Thinking)」のことです。これは教科書編集に当てはめると、各課の前後にあるその課に関する練習問題や活動、あるいは課と課の間にあるSpeakingやWritingに関する活動になります。以下が、これらがどのように扱われているかの概観です。

(1) Reading

各セクションの〈Q&A〉と〈Read Again〉、各課第1セクションの〈Reading Skill〉、課末の〈Comprehension〉

(2) Speaking

各セクションの〈Try〉、課末の〈Self Expression〉、〈Let's Try〉の〈Key Expression〉と〈Interaction〉

(3) Listening

課末の〈Comprehension〉、〈Let's Try〉の〈Starter〉と〈Dialog〉

(4) Writing

課末の〈Self Expression〉、〈Let's Try〉の〈Interaction〉

(5) Thinking

各課タイトルページの〈Before You Read〉、課末の〈考えてみよう〉、課末の〈Self Expression〉、〈Let's Try〉の〈Interaction〉

『MY WAY』はこの5技能の、教科書としてのバランスは当然とっていますが、とりわけThinkingとReadingには重点を置いています。Thinkingはあらゆる技能の中核です。Readingは4技能の根幹に位置し、Thinkingを促進させます。この2つは、日本のTEFLの環境(30~40名の学級規模の一斉授業)にも合致しています。新生『MY WAY』ではこのような「不易」を底流において、「流行」の対策としてReading Skillsの網羅化・体系化を図りました。たとえば、〈Reading Skill〉の最初の段階では、いわゆるSlower Learners用のReadingの活動の極めて基本的な知識や指導法も扱っています。『I』の第1課と第3課では、以下のような「スキル」を取り上げました。

・Reading Skill 1【動詞と名詞】

第2段落7行目を読みながら、動詞を□で囲み、名詞に下線をつけましょう。

例：Do you say your given name first?

・Reading Skill 3【主語と述部】

第2段落5行目を読みながら、各文の主語を□で囲み、(述語)動詞に下線をつけましょう。

例：Today the number of such buildings is increasing gradually.

Slower Learnersに対しては、最初はこの確認から始めなければいけないのです。どれが名詞か動詞かがわからないからです。これまでの教科書ではこの種の手当てを行っていなかったのです。このように極めて基本的な活動を加える一方で、後半の課では、パラグラフ・リーディング、スキミング、スキミングなどのReading Skillsも取り入れています。さらに、各課末の活動の中に、深いThinkingを促すPISA型読解力を問うています。これは、母語の国語教育でも高度とされている活動です。この「超基礎」から「超発展」までのReading Skillsを教科書で取り上げているのは、新生『MY WAY』が本邦初ではないかと自負しています。これは『I』の例でしたが、『II』でも重要なスキルはスパイラルで再度取り上げながら、新しいスキル、たとえば、話題の提示、未知語の推測、ディスコースマーカーなどを取り上げています。この丁寧さも本邦初だと思います。

教科書構成 — 新しい工夫

教科書構成は、本文と練習問題の位置や提示順序に関わることです。ここでは「流行」です。つまり一見、『EXCEED』の改訂版とは思えないくらいに変えました。これまで『EXCEED』では本課本文をセクション1, 2, 3などと続けて提示し、その後でまとめて解説や練習問題を扱ってきました。新版『MY WAY』ではこの方式を改めて、各セクションは左側に本文、右側に活動や練習問題としました。現在の多様化した生徒の事情に合わせるためです。この形式自体は、他の教科書で既に提示されていますので、『MY WAY』の特許というわけではありません。あえて、新しい工夫と言いますと、右ページの文法の説明の内容です。シロクマやペンギンのキャラクターに吹き出して語らせている「一言説明」にご注目ください。平易な日本語で「簡にして要を得た」説明にしたつもりです。また、各課のセクション1に上述の〈Reading Skill〉を取り上げていること、それも、毎回、本課本文に絡めて取り上げていることが今回の『MY WAY』の「流行」です。考えてみますと、本課本文を関係させずにReading Skillsを説明するのは、生徒からすれば期待はずれ、教師からすれば的外れな感を禁じ得ません。

おわりに

以上、新版『MY WAY English Communication I・II』の特長として、メッセージ性の高い題材、文法と語彙の増強、Reading & Thinkingの充実、教科書構成の工夫の4点について説明してきました。このうち最初の3点は、各学校の環境や状況に応じて差はありますが、学校教育における英語教育として「すべての」高校生に保証したいと考えています。なお、今回は紙幅の都合で取り上げなかったコラムや活動がいくつかあります。たとえば、2課ごとに配置した〈Let's Try〉の[Starter]で扱っているListening、[Dialog]の会話文の題材です。また、フォニックスや発音、かぶせ音素を取り上げた〈Sounds〉です。さらに、課末の〈Self Expression〉で取り上げているWritingやSpeakingの活動などです。これらについては省略しましたが、『I』の供給本および『II』の見本本で、上記の4点と合わせて、ご確認いただければと願っています。

特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『VISTA English Communication I・II』
の編集方針と内容

昭和女子大学 金子朝子

いよいよ平成25年度から学年進行で新学習指導要領に移行となる。必修の「コミュニケーション英語I」の教科書『VISTA English Communication I』は、非常に好評を得て多くの高校で採択していただいている。続いて、平成26年度用の『VISTA English Communication II』が刊行となる運びである。『VISTA II』も『I』と同様に、易しい英語を通してバラエティに富んだ話題と場面を提供する教科書となっている。『VISTA I』を採用していただいている高校はもちろんのこと、まだ、ご採用いただけない高校の先生方にも、『VISTA I』、『II』の基本的な編集方針と、特に『II』の内容についてここで紹介をさせていただきたい。

(1) 編集の基本方針

『VISTA』は創設以来、「英語の学習を通して、ことばと人間や社会との関係など、広くことばへの関心を高め、ことば・文化・民族の多様性とその共存、自然と人間との共生の大切さを学ぶ」教科書作りを、その基本方針としている。基礎的な英語の定着を図り、学んでみようとする動機づけを高める内容づくりに力を注いでいる。

(2) VISTAの特徴**① グローカルな視点**

『VISTA』では、グローバルに世界の様々な文化を学ぶとともに、ローカルに自国や地域の文化を再発見しながら、地球とそこに住む者との共存、共生を考える視点を大切にしている。新学習指導要領にもあるように、外国語の仕組みやその言語の背景にある文化に対する理解を深めることは、日本語や日本の文化に対する理解を深め、広い視野や国際感覚、国際協調の精神を備えたグローバル人材の育成にもつながるものである。

グローバルな視点を取り入れるために、題材の選択は最も重要である。『VISTA II』の10レッスンには、世界の朝食、アイルランドの文化、さかなクン、ノーベル賞のエピソード、ツタンカーメン、ユニークな国々、ガラパゴス島、書道パフォーマンス、水族館、日本とトルコなどバラエティに富み、しかも、生徒の興味、関心と呼ぶ話題性の高い題材を揃えている。

② 「わかる」英語

たとえ英語に対して苦手意識を持ち、あまり興味を寄せていない生徒でも、教科書を「開いてみよう」と思い、読んでみたら「わかる」と思ってもらえる教科書、つまり、英語学習への動機づけとなる教科書であることを心掛けた。

とにかく教科書を「開いてみよう」と思ってもらうために『VISTA II』は、上記のように生徒が関心を持つ題材や話題性のあるテーマを揃えている。そして「わかる」と思ってもらうために、各レッスンの構成を次のように工夫した。

まず、トップページのタイトルはできるだけ短く、端的にそのレッスンの題材の内容を表すものとした。次に、その下に簡単な日本語での導入がある。指導書には英語版のサンプルが掲載されているので、英語で導入をしたい先生方には参考にしていただける。また、同じページにはレッスンの内容を想像しやすいように1ページのほとんどを使う大きな写真を利用したWARM UP!がある。日本語で3題の簡単な質問があり、生徒は写真にまつわる易しい英語を聞いて解答する。次に、レッスン本文は3セクションに分かれ、セクションごとにReading Pointが提示されている。該当のセクションから何を読み取ればよいのかのポイントがわかる。1レッスンで扱う文法は2項目に絞ってある。本文中の新出文法にはマークをつけ、本文の後ろの文法解説STUDY

IT!が参照できる。また、内容に関する英語のQ&A!が各セクションにあり、内容理解の手助けとなっている。発音については、生徒が使うほとんどの辞書がすでにカナ発音を用いており、発音記号に馴染みのない生徒への配慮から、発音記号とカナ発音を併記した。

③ 基礎・基本の定着

中学校での指導内容との円滑な接続を希望する現場からの声は大きく、『VISTA I』では、生徒の実態に応じて「コミュニケーション英語基礎」もカバーできるような内容とした。特に文構造や文法事項については中学校の指導内容を再整理し、高校での新しい学習事項は要点を繰り返し学べる構成とした。新学習指導要領では、「コミュニケーション英語I」のみが必修のため、高等学校で学ぶべき文法はすべて『VISTA I』でカバーしているが、『VISTA II』では、それらの基礎を土台に、話し手、聞き手の考えや気持ちを理解し、聞き手、読み手に自分の考えや気持ちを伝えるための文の構造や、表現を学ぶ練習を多く組み込んである。

前課の新出文法は、次のレッスンで必ず繰り返すように配慮したのも『VISTA』の特徴である。教科書では、ある文法事項を一度学ばると、その後全く使われなかったり、忘れたころに出てきたりするものが多い。VISTAでは、同じ文法事項を次のレッスンの違うコンテキストの中で繰り返し用いることで、生徒から「これは前のレッスンで勉強したな」という気づきを促したいと考えている。

④ コミュニケーション能力の育成

新学習指導要領の改善事項の1つに、生徒が英語に触れる機会を豊富にすることが盛り込まれている。多様な場面における言語活動を経験させながら、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を有機的に関連付け、総合的なコミュニケーション能力を育成しようとするものである。

『VISTA』では、易しい英語を上手に使う豊富な英語のインプット、インタラクション、アウトプットの機会を作るよう配慮した。インプットとして「聞く」機会を豊富にするために、レッスン導入のWARM UP!では簡単な英語によるクイズ形式のイントロがあり、本文の後のPRACTICE!でも必ず新出の文法事項をターゲットとしたリスニング問題を配置した。また、「読む」機会を増やすために、

Reading Skillのコーナーを置き、英文を正確に読むコツを学ぶ。インタラクションについては、まず、本文の各セクションのQ&A!が教師と生徒間や生徒同士が英語で聞いて話す機会となる。さらに、PRACTICE!にも必ず英語で情報交換を行う練習があり、ENJOY COMMUNICATION!のコーナーでは、英語を使用する場面を想定して、その場面でよく用いられる表現を中心に会話をする。生徒の実態に応じて、4技能を組み合わせて活用ができる。アウトプットとしては、特に易しい英語で「書く」機会を増やしてある。各レッスンの後にTHINK!のセクションを置き、まず、本文の内容を深く統合的に考えてもらうためにPISA型の問題を置いた。次に、テキストの内容を英語でまとめる穴埋めを行う。単にテキストから単語を拾う作業ではなく、テキストが伝えたいことは何かをつかんでから、英語でまとめを行う仕組みになっている。また、USE ENGLISH!をレッスンごとに置き、『VISTA I』では「褒める」「事実を報告する」「提案する」「理由を述べる」などを、『VISTA II』では「アドバイスする」「依頼する」「賛成や反対をする」「結論をまとめる」など、言語の機能に配慮しながら、それぞれのレッスンの内容に関連した事柄について4技能を統合して用いる機会としている。

(3) 文法の扱い

中学校で学習した基礎文法の復習・確認のために、『VISTA I』では本文に入る前に「ののちゃんの英文法—基礎を復習しよう—」を掲載している。ここでは、主語、be動詞、一般動詞、目的語、形容詞、副詞、前置詞、冠詞を取り上げ、文法の基礎の基礎を復習する。「ののちゃんの英文法」のねらいは、高校でより複雑な文構造を学ぶ前に、文を構成する1つ1つの要素についてもう一度確認することにある。生徒の理解度に合わせて様々な活用が可能である。新学習指導要領では、「コミュニケーション英語I」が全生徒必修となり、学習指導要領にある8項目の「文法事項」のすべてを「コミュニケーション英語I」で扱うこととなった。したがって、『VISTA I』では中学校で学習した事項に加えて、不定詞、関係代名詞、助動詞、代名詞のうちitが名詞用法の句および節を指すもの、動詞の時制などについて、より深く学び、さらに高校で初出の関係副詞、仮定

法、分詞構文も学ぶことになる。『VISTA II』では、疑問詞やifで始まる節、比較表現、名詞を修飾する分詞、知覚動詞、tell～to do、使役動詞、関係代名詞what、how to do、It seems that～、現在完了進行形、形式目的語it、部分否定、can be done、関係代名詞の非制限用法、have been done、過去完了形、強調構文等を学んでいく。

『VISTA』では、できるだけ運用度が高い文構造や文法事項を、言語活動を行いながら学べる様に配慮した。高等学校で初めて学ぶ事項については、典型的な使用例のみに絞って指導することとしている。

(4) 語彙の増加

新学習指導要領では、学ばべき語彙が300語も増えた。「コミュニケーション英語Ⅰ」では400語、Ⅱ、Ⅲでは各700語が新出となり、中学と高校を合わせて、これまでの2,200語から一気に3,000語を学ぶことになる。中学既習語に上乘せする語彙は400語で現行と変わらないが、実は中学での履修語彙がすでに300語増えているので、『VISTA』で学ぶ語彙レベルもどうしても高くなる。

『VISTA』では、本文の各ページの新出語彙数は、人の短期記憶が7±2であることを考慮して、多くても9語までに抑えた。そのために、かなりの語彙数の上乘せを本文だけでこなすことが難しく、速読用の読み物として『VISTAⅠ』ではThe Little Princeを、『VISTAⅡ』ではCharlie and the Chocolate Factoryを易しくリライトしたENJOY READING!や、楽しんで英語に触れてもらうためのTake a Break!、また、巻末のUSE ENGLISH!表現集(VISTAⅠ)や、SUDY IT! Useful Sentences [活用例文集](VISTAⅡ)にも新語が加えられている。

巻末のWORD LISTにも語彙学習のための工夫がある。辞書を教室に持参しない生徒が多くなり、現場からの強い要望を受けて、簡単な辞書の機能も持たせた。生徒が学んだ語彙をチェックできるように、四角のマークを付した。語彙リストも活用することで、新しい語彙を積極的に言語活動に使って欲しいと考えている。

(5) 英語で授業

学習指導要領に「英語で授業を行うことを基本とする」とあるのは、教師が英語で授業を行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ英語を使用することによって、英語による言語活動を中心とした授業の展開を期待していることを意味している。しかし、生徒の理解の程度に応じた英語で授業を行う配慮は重要である。生徒の理解度を把握しながら、簡単な英語でゆっくりと繰り返して話すことで、生徒が英語の使用に慣れるよう指導をしていきたい。もちろん、この規定は英語で授業を行うことの重要性を強調するもので、授業のすべてを必ず英語で行わなければならないということではないことも確認しておきたい。

小学校5年生から「英語活動」を通して英語に慣れ親しみ、中学での言語活動を中心とした英語の授業を受けた生徒が高校に入学するのは、2016年のことになる。それまでに、少しずつ英語での指導の割合を増やしていくようにしたい。

授業中の教師の発話は大きく分けると、社会的目的で使うもの、授業運営の目的で使うもの、授業の内容そのものを指導する目的で使うものに分類される。まずは、社会的目的で用いる授業の始めと終わりの挨拶や生徒との個人的な話のやり取り、そして、授業運営の目的で使う“Please open to page 10.”などのやり取りから、英語を使う機会を増やしてはどうだろうか。『VISTAⅠ』には、Get Ready!と題した教科書に入る前のPre-Taskの1つとして、教師や生徒が授業で使う英語の表現を掲載している。手始めに、ぜひここを活用して欲しい。

授業中の教師の発話は大きく分けると、社会的目的で使うもの、授業運営の目的で使うもの、授業の内容そのものを指導する目的で使うものに分類される。まずは、社会的目的で用いる授業の始めと終わりの挨拶や生徒との個人的な話のやり取り、そして、授業運営の目的で使う“Please open to page 10.”などのやり取りから、英語を使う機会を増やしてはどうだろうか。『VISTAⅠ』には、Get Ready!と題した教科書に入る前のPre-Taskの1つとして、教師や生徒が授業で使う英語の表現を掲載している。手始めに、ぜひここを活用して欲しい。

このように『新VISTA』は、生徒が英語の基礎・基本を確実に身に付けてそれらを活用しながら学習を進められるように、また、生徒の理解の程度に応じて補充的な学習や発展的な学習もできるように、様々な配慮をしながら編集を行った。ぜひ、多くの先生方と生徒たちに活用していただけることを祈ってやまない。



特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『CROWN English Expression I・II』の編集にあたって



電気通信大学 松原好次

はじめに

「役に立たない英語」— 英語教材の宣伝が学校英語を批判する際によく使う表現です。さらに、「英語学習に文法は不要」というメッセージとともに、学校英語を切り捨てます。

この宣伝文句を支持する人は多いかもしれませんが。しかし、『CROWN English Expression I・II』の編集に際し、私たちは上記の考え方を振りどころにしませんでした。私たちが出発点としたのは、「文法は自己表現にとっての地下水脈である」という考え方でした。「文法学習を礎として、英語による表現活動に取り組んでほしい」という願いを込めて、『英語表現Ⅰ』と『英語表現Ⅱ』の編集にあたった次第です。

『英語表現Ⅰ』に文法の基礎編を配置し、『英語表現Ⅱ』に応用編を追加することによって、文法項目を網羅するという方針をとりました。下記の表に示すとおり、基礎から発展への段階的指導が無理なくできるという点に注目していただけるように、『CROWN English Expression II』の編集方針、題材選択の基準、構成と各パートの到達目標を紹介いたします。

編集の基本方針

『CROWN English Expression I』に引き続き、新学習指導要領の目標に即して、以下の2点を『CROWN

English Expression II』の編集の基本方針としました。

(1) 日本および世界各地に住む人々の生活や文化を可能な限り紹介することによって、“自他の文化への目覚め”を促し、自己表現への後押しをする。

自らとは異なる生き方・考え方に触れて、高校生は自分自身の姿を振り返ることができるようになります。そこで、他の国・地域に暮らす人々に関心を抱き、異質な事物を正しく理解できるように導く必要があります。他者を意識することによって、日本の事物を見つめ直す視点が獲得できるものと思われます。グローバル化した世界のなかで、自他の生活や文化を双方向的に理解しようとして初めて、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする」意欲が湧き出てくるものと考えます。英語教育の目標を「グローバル・シティズンシップの養成」に置く考えがありますが、『クラウン英語表現Ⅰ・Ⅱ』の編集の基本方針もそこにあると言えます。

(2) 大部分の生徒の母語である日本語を資産(resource)とみなし、英文法を真正面から取りあげることによって、“ことばへの気づき”を促し、自己表現への後押しをする。

母語(ENL)あるいは第二言語(ESL)としてではなく、外国語(EFL)として英語を学ぶ以上、目標

『CROWN English Expression I』と『CROWN English Expression II』の関係

	文法	Writing	Speaking
『英語表現Ⅰ』	基礎編 (本課16レッスン)	センテンス・ライティング	スピーチ・プレゼン(基礎)
『英語表現Ⅱ』	発展編 (本課10レッスン)	機能・概念表現 パラグラフ・ライティング エッセイ・ライティング	スピーチ・プレゼン(発展) ディスカッション・ディベート

言語の仕組みを意識的に把握する必要があります。長い海外勤務歴をもつ私の同僚や友人は、「学習のある段階で、“きちんとした英語”を身につけておかなければいけない」と口を揃えて言います。「事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら情報や考えを伝える」ためには、高校段階で英語の文法を体系的に習得しておかなくてはならないわけです。『CROWN English Expression I』が、文型・時制から仮定法まで、文法の基礎的事項をほぼ網羅するように編集してあるのに対し、『CROWN English Expression II』は、発展的事項を加えることによって重要項目の全体像を提示しています。日本語的発想と英語的発想との格闘のなかで、ことばの面白さや怖さに気づき、“表現したい”という意欲が学習者一人ひとりに芽生えてくることを期待して、編集作業にあたりました。

題材選択の基準

『CROWN English Expression I』の編集の際と同様に、以下の2点を基準として題材を選択しました。

(1) 編集方針(1) に則って、可能な限り世界各地の文化・風俗習慣・言語・科学技術・自然・地理・歴史などに題材を求めると同時に、日本の事物についても英語で表現する際に必要となるであろう題材を選ぶ。

本課レッスンで取りあげた世界各国関連の題材としては、ナスカの地上絵、アンネ・フランクの隠れ家、ハワイの日系人などです。Speakingの課では、ケニアの自然や都市などを取りあげました。また、解説や設問の部分にも、世界各地に関わる例文を意識的に挿入しました。たとえば、異文化理解の観点からは、トルコの食文化に関するエッセイを載せました。自然・地理・歴史の視点からは、干上がったアラル海、ポンペイ遺跡、考古学者シュリーマンなどに触れました。社会問題としては、水不足などを例文のなかに入れてあります。科学技術の側面からは、スティーブ・ジョブズとコンピュータなどについて触れています。

一方、日本については、小笠原のエコツアー、コンビニの夜間営業などを本課の題材として選択しました。Speakingの課は、現代日本のペット飼育事情を取り扱っています。解説や設問のなかにも、伝統的事物だけでなく、同時代的要素を含む語句も意識

的に配しています。たとえば、iPS細胞、介護用ロボット、放射性物質、英語の社内公用語化、『ワンピース』などの語句です。

(2) 編集方針(2) に則った文法学習は、ややもすると味気ないものになりがちなので、知的好奇心を出発点として言語の学習に取り組めるように、“生徒が飛びつきたくなくトピックで、しかも芯のある題材”を選ぶ。

文法学習を中心とするPart 1に配置されたトピック(「日本は水の輸入国?」「笑えばガンが治る?」など)が、高校生の知的好奇心を刺激し、スムーズに言語学習へ移行できるように工夫を凝らしました。つまり、学習者の抱いている常識に揺さぶりをかけてから、イントロ文に潜んでいる文法項目に目を向けさせるという趣向です。

Part 2やPart 3にも、ジョン万次郎の手紙、『バカの壁』などで生徒の関心を喚起し、本課レッスンの導入がスムーズになるように工夫してあります。

構成と各パートの到達目標

『CROWN English Expression II』は3つのパートから成り立っています。各パートの構成・流れ・到達目標は以下のとおりです。

Part 1 基礎編(センテンス・ライティング)

A. 構成

『クラウン英語表現I』(文法の基礎16レッスン)に引き続き、『クラウン英語表現II』では、各レッスン見開き2ページ構成の10レッスンを、文法の応用的項目にあてています。また、文法の定着を図るため、5課ごとにGrammar Profileを設けてあります。

本課の合間に、Speakingのレッスンが2つ(スピーチとプレゼンの基本)設けられています。

B. 英語による表現までの流れ

本課各レッスン見開きの左ページ最上段には、写真の人物・事物の紹介文(約80語)を載せました。授業の導入がスムーズにいくように、Listening ComprehensionのT-F問題を3つ用意してあります。その下にG-file(文法項目の簡潔な説明)、CHECK(確認のための問題)、Expression(追加の例文)、名言コラム、One Point(日本人の英語学習者が誤りやすいポイントに焦点をあてた正誤問題)が続きます。右ページには、Ex-file(空所補充、語

句整序、部分英訳の問題)の後にTry(各課の題材と文法項目を使い、自分の意見を書いたり話したりするコーナー)が配されています。このコーナーでは、下線部分を参考に自由英作文をしたり、ペアでの会話をしたりして、コミュニケーション活動のなかで重要表現の定着を図ります。

Speakingレッスンの場合、見開き左ページにスピーチまたはプレゼンテーションのモデルスクリプトを、右ページに「スピーチ/プレゼンでよく使われる表現」と「質疑応答でよく使われる表現」を載せてあります。そして、右ページの最下段に配されたYour Turnで、自分の趣味についてのスピーチ原稿や訪れてみたい国についてのプレゼン原稿を空所補充形式でまとめます。

C. 到達目標

本課の到達目標は、トピックと関連した内容について、各レッスンの文法項目を活用して、ワン・センテンスで表現することです。またSpeakingでは、スピーチおよびプレゼンの基本を把握したうえで、指定されたテーマについて実際に英語で原稿をまとめることが到達目標になります(Part 2も同じ)。

Part 2 応用編(パラグラフ・ライティング)

A. 構成

本課には、さまざまな機能表現(依頼、許可、忠告、勧誘、賛成・反対など)を各課4ページ構成で8レッスンに配置しました。

Toward Paragraph Writingには、「つなぎ表現」や「言い換え」など、パラグラフを効果的にまとめるためのコツが示されています。Speakingのレッスンには、スピーチ・プレゼンの発展編を配置してあります。

B. 英語による表現までの流れ

本課の第1ページのテキストには、可能な限りauthenticな英文を使用しました。第2ページのF-fileでは、機能表現を含んだlistening comprehensionのCHECKを配置してあります。第3・4ページにかけてEx-fileの大問が5問あります。第5問は、各課の表現テーマ(機能表現)を活用して空所補充することにより、一つのパラグラフが完成されるという仕組みになっています。最後に、自由英作文を課すTRYのコーナーがあります。

C. 到達目標

Part 2本課の到達目標は、トピックと関連した内

容について、各レッスンの機能表現を活用してワン・パラグラフで表現することです。大学入試の出題を元にしたTRYでは、40～80語程度でワン・パラグラフをまとめることを課しています。

Part 3 展開編(エッセイ・ライティング)

A. 構成

Part 3は、本課2レッスンと、新学習指導要領で指定された「ディスカッション」「ディベート」を含む2つのSpeakingレッスンで構成されています。

B. 英語による表現までの流れ

見開き4ページの第1ページにエッセイを載せ、第2ページには例証や要約などに関する表現を含むF-fileの他に、listening comprehensionを用意しました。第3・4ページに設けられた空所補充問題により、エッセイの基本構成を確認できるように工夫してあります。

Speakingレッスンでは、第1・3・5ページにDiscussion/DebateのスクリプトとComprehensionを載せ、第2・4・6ページにExpressions for Discussion/DebateとPracticeを配置し、段階的にディスカッションやディベートに必要な表現を使用できるように編集してあります。

C. 到達目標

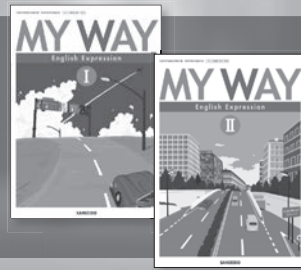
本課レッスンの到達目標は、エッセイの構成を把握したり、要約文を作ったりすることです。さらに、Speakingの2レッスンでは、ディスカッションとディベートの流れを具体例で確認してから、Practiceで役割を交替しながら、実際に英語で表現できるようになることを到達目標としています。

おわりに

新学習指導要領は、「伝える能力」の育成を「英語表現」の主眼とすべきであるとしています。しかし、さまざまな条件の下で、「伝える能力」の育成を中心に据えた授業に取り組むことは容易ではありません。そこで私たちは、学習指導要領のねらいと現場の先生方の声をつなぐ架け橋となるような教科書作りを目指そうと心がけました。『CROWN English Expression I・II』は、中学・高校の教員が中心となって編集しましたので、先生方のニーズに合致した教科書ができたのではないかと自負しております。ご一読いただけたら幸いです。

特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『MY WAY English Expression I・II』 の編集方針 —英語のしくみを学び、 論理的な表現力を養う—



同志社女子大学 飯田 毅

1. はじめに

『My Way English Expression』は、『My Way English Expression I』（以下、『英語表現I』）と『My Way English Expression II』（以下、『英語表現II』）の2部構成になっています。その狙いは、生徒一人ひとりが言語能力と言語感覚を磨き、明確な論理展開の方法と表現力を培い、将来、諸外国の人々とコミュニケーションが取れ、ひいては親密な人間関係を築いていける態度を育成することにあります。

その目標を達成するために、著者である私たちは以下5つの編集方針で臨みました。第1に、生徒が英語のしくみ(文法)を体系的に学べるようにしました。次に、学習内容を絞り、生徒が無理なく基本的事項を学べるように配慮しました。3番目に、文型・文法事項を学ぶレッスンと「聞く・話す活動」「書く活動」であるProject Work等を分け、生徒が取り組みやすいようにしました。4番目に、文法シラバスレッスンに題材(トピック)を設定し、生徒の記憶に残りやすく、題材について表現しやすいようにしました。最後に、生徒がレッスンごとに英語で表現する活動も無理なくできるように配慮しました。

2. 『英語表現I・II』の構成と特徴

『英語表現I・II』の全体の構成について簡単に述べておきましょう。『英語表現I』は5つのUnitに分かれていて、それぞれのUnitで、ある程度関連のある基本的な文法事項を学んでいきます。5つのUnitは次のような構成になっています。Unit 1は時制、Unit 2は助動詞と受動態、Unit 3は不定詞、動名詞、分詞、Unit 4は比較と関係詞、Unit 5は仮定法、否定、話法、接続詞です。『英語表現II』では、3つのPartに分かれ、Part 1が『I』と同じような4

つのUnitを持った、やや応用的な文法事項や英語の特徴的な構文を扱っています。Part 2ではパラグラフ・ライティングの基礎を、Part 3ではディスカッションとディベートの基礎を学びます。このように、本書は基礎的な文法項目から、最終的にはパラグラフ・ライティング、ディスカッションやディベートまで幅広く学べると言う点で、総合的な表現の教科書です。

次に、本教科書の特徴を7つにまとめて述べてみましょう。

(1) Useを毎回の目標とした文法シラバス

本教科書では英語のしくみである文法・文型を重視します。しかし、英語のしくみだけを理解するのではなく、それらを用いて最終的に生徒が教室で表現活動ができることに狙いがあります。そこで、『英語表現I・II』の毎回のLessonでは、Learn, Practice, Useという段階を踏んで学んでいきます。Learnで学んだ文型・文法事項を、Practiceで意味のある練習をし、最終的に生徒の身近な場面で使うUseに到達できるようになっています。こうして、話したり書いたりした基礎の上に、総合的な言語活動であるProject Workを取り入れました。

『英語表現I』では、中学校で学んできた基礎的な文法事項を復習しながら、新しい文法事項を学んでいきます。例えば、Unit 1では時制を扱いますが、この中の新出文法事項は、現在完了進行形と過去完了形です。『英語表現II』では、『英語表現I』で扱えなかったやや応用的な文法事項を扱います。その際に、『英語表現I』で扱った文法事項の復習から始まることで、『英語表現II』で学ぶ新出文型・文法が学びやすいように配慮しました。このように本書では、1つ1つの文法事項を丁寧に扱って、何より生徒が理解できるように配慮しています。

(2) 学びやすい文法配列と意味のある文法のまとめ

従来の文法教科書の問題は、機械的な練習問題を解くことだけに終止している点です。そこで、本教科書では、Unitという文法事項のまとめを作り、その中で体系的かつ意味を重視した指導ができるように工夫しました。例えば、Unit 1では、日本語と大きく異なる英語の時制を扱い、中学校で学んだ時制を含めて英語の基礎的・基本的な時制を学びます。Unit 2では、助動詞を話者の心的表現と捉えます。また、受動態の形式だけを指導するのではなく、受動態が使われる際に重要である「話し手の視点」という観点から取り扱います。つまり、これは1つの出来事を表現する際に、話し手が何に焦点を当てるかによって、能動態になったり、受動態になったりするという点です。また、それぞれのUnit終了後には、Unitで扱った文法を復習します。さらに、生徒の文法に関する意識を高めるために、英語のしくみとコミュニケーションを結びつけたGrammar for Communication というコラムを設けています。

『英語表現II』では、基本的に『英語表現I』で取り上げられなかった文法事項を扱います。具体的には、Unit 1で「時制、助動詞、受動態の発展」、Unit 2では、「不定詞、動名詞の発展」、Unit 3では、「比較表現、関係詞、仮定法、否定表現、話法の発展」、Unit 4では、「重要構文の学習」になっています。例えば、現在進行形の基本は『英語表現I』で学びますが、「近い未来を表す」現在進行形は『英語表現II』で学びます。

(3) 中学と高校の橋渡し

小学校の英語教育が始まり、中学との連携の重要性が言われていますが、中学と高校の連携も古くて新しい問題です。私自身、高校生になったときに、中学との英語の授業の違いに戸惑ったことがあります。その最も典型的な例は、基本的な文法用語を知らないことから起こる問題です。高校の先生が何気なく使っている文法用語がわからず、英語が急に難しくなったと感じる高校生が多いからです。文法用語の知識と英語力との間には何も関係がありません。文法用語は、本来、英語のしくみを説明する際に使うと便利な言葉です。その便利な言葉が生徒の理解の障害になる場合があります。そこで、『英語表現I』では、教科書の本課の前にGet readyとい

う復習の課を設けて、英語の文法の基礎を身につけると同時に基本的な文法用語を理解できるようになっています。その中には、例えば、高校生にとっては難しく感じる英語の冠詞の用法の基本が、名詞の単数・複数とともに解説されています。もう1つの中学と高校のギャップの問題として、扱う文法項目の間の関係がよくわからないということがあります。それに対して本教科書では、Unitの最初の扉は、その中で扱う文法事項の要点を生徒にわかりやすくなるように図にまとめ、Unit内で扱う文法項目間の関係もできる限り関連づけられるように示してあります。こうして生徒はUnit内で何を学ぶのかを理解し、目的を持って学べるようになります。

(4) 1つの課に含まれる様々な活動

それでは、見開き2ページになっているLessonについて、もう少し詳しく述べてみましょう。生徒は写真を見て正しい英文を選ぶlisteningの活動から入ります。次に、Learnでは目標となる文法項目を代表する2つの基本文と、同じ文法項目に関する別の例文が簡潔でわかりやすい解説とともに示されています。その次に、目標となる文法項目の理解度を確かめる簡単な練習問題、Checkがあります。ここまでが見開きの左側の部分です。時間配分としては、ここまでの1時間の予定です。右側のページは、練習問題であるPracticeと目標となる文法項目を使って生徒自身が文を書き、話す活動となるUseです。練習問題と言っても、機械的な練習ではなく、意味を考えた練習問題が含まれています。例えば、Grammar in Useでは、目標となる文法事項を使った50 words程度のまとまった文章があり、英語を聞いて、空所を補充するdictationの活動と全体を通して音読する活動が含まれています。また、生徒の理解を助けるために、右側にその文章に関する日本語のOutlineが示されています。Exerciseでは、目標文法事項に関する練習問題が易から難へと配列されています。そして、最後にUseがあり、ここで生徒は目標文法項目を使って、英語の1文を書き、それを基に発話することになります。

(5) テーマや英文から、文化や言語に対する気づきを促す

文法参考書にはあらゆる文型と詳しい説明が書か

れていますが、欠点として、生徒が表現したい一貫したテーマに基づいて書かれていません。本教科書では、それぞれの課ごとに、ゆるやかに統一されたテーマがあります。例えば、『英語表現Ⅰ』のLesson 8は「興福寺の阿修羅像」となっています。全体が阿修羅像の話ではなく、日本の伝統文化を扱いながら、Grammar in Useでは阿修羅像がテーマになっているのです。また、練習問題には「江戸時代には梅の花が好まれていた」、「アイヌ語はかつて北海道で多くの人々に話されていた」というような伝統文化や言語に対して、生徒の気づきを促すような例文も多く含まれています。

(6) 論理性を養う3行の英作文と Paragraph Writing

『英語表現Ⅰ』のUnitの最後には、全体をまとめた文法問題とともにWrite a Paragraph!という活動が設けられています。この活動の目的は、Useで行ってきた1行英作文を3行の最小のパラグラフにすることです。正式にはパラグラフとは言えないかもしれませんが、生徒は「導入」「展開」「結論」という指示に従って、文と文との論理関係を理解しながら、英語で文章を作っていくこととなります。この活動は『英語表現Ⅱ』で、本格的なパラグラフ・ライティングの基礎を学ぶ事につながります。『英語表現Ⅱ』で扱うパラグラフの基本は、「例示・列挙」「分類」「比較・対照」「原因・結果」「分析」です。Learnでパラグラフの基本を学び、Practiceを通して練習問題を解きながら、Write a Paragraph!で段階を踏んで最終的にパラグラフが書けるように工夫してあります。従来のライティングの教科書では、本教科書のような細かい学習段階を踏まないために、パラグラフを書く事を諦めてしまう場合が多かったようです。本教科書はそのことを避けるために、生徒が一人だけでも学習できるように配慮しました。このパラグラフの練習を通して、生徒は文と文との関係を考え、論理的表現方法の基礎を学んでいきます。

(7) 総合的な言語活動

(Project Work、Discussion、Debate)

『英語表現Ⅰ』では総合的な言語活動が全体で5つ用意されています。それぞれ活動展開が異なりますが、全体の流れとしては、英語を聞いたり読んだり

する活動から生徒の立場でまとめた英語を書き、話す活動へ段階を踏んで作られています。さらに、それぞれには話す際に注意すべき点として、Tips for Speaking というコーナーが設けられています。

『英語表現Ⅱ』では、Project WorkにDiscussionとDebateが加わっています。今まで、この種の活動は「オーラル・コミュニケーションⅡ」という科目に入っていたものです。先生方の中には、本当にこのような活動ができるかどうか不安に思っている方もいるのではないのでしょうか。そのような心配はいりません。いずれの活動もIntroductionで話題の確認をし、Preparationで自分の立場を決め、他人の意見を聞く練習をし、Your Turnの所で、実際に英語でディスカッションしたり、ディベートをする事になります。このように初めて英語でディスカッションやディベートを教える場合でも、生徒が自然に活動できるように配慮されています。ここで大切な事は、実際に英語でやってみるということです。片言の英語でいいのです。日本語が混ざってもいいのです。重要な事は、そのような体験を通して、どのように英語を話すのか、ということを生徒に考えさせる事です。英語でやり取りができないのは、心理的な問題なのか、表現力が十分についていなかったのか等の原因を考えさせ、最終的に、もう一度個々の文法項目の表現に戻る事にあります。このように実際にコミュニケーションをしてから、もう一度個々の表現方法に戻る事ができるのもこの教科書だからできるのです。

3. おわりに

以上が『英語表現Ⅰ・Ⅱ』の特徴です。最後に、「英語で行う授業」に関して簡単に述べておきましょう。本教科書を使って、英語で授業を行うことは可能です。しかしながら、英語で授業を行うことが到達目標ではなく、生徒のコミュニケーション能力を育成するための1つの手段と考えます。本教科書では、文法解説は、むしろ日本語で行うべきです。このことは学習指導要領の解説にも書かれています。最近のBilingual教育でも言われていることですが、英語で授業を行うことよりも、両方の言語を伸ばすために両言語をどのように意図的・計画的に使っていくかが課題です。ぜひ、本書を手にとってご覧ください。

特集 「新教科書2」— これからの英語教育

『SELECT English Expression I』の基本方針と内容紹介

一意欲を起こさせる教科書をめざして—



成城大学 井上 徹

はじめに

新学習指導要領の採択2年目にあたり、この度、『SELECT English Expression I』を世に問うことになりました。この教科書は、生徒に意欲を起こさせることをめざして誕生した「英語表現Ⅰ」の教科書です。英文法に関する意識を高め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することを目的にしています。

『セレクト英語表現Ⅰ』の特色

『セレクト英語表現Ⅰ』は、英語を「学び」「復習する」ことと英語を「使う」ことを並行して行い、学んだ英語が実際に役立つと実感してもらうための教科書です。内容面でもタスク活動面でも、生徒の注意を引く面白さを随所に盛り込んでいます。言うまでもなく、外国語学習で一番大切なことは、長期に渡って学び続けることです。本教科書では、生徒の学習の継続を促すために、生徒の興味・関心を呼び起こす身近な話題を選び、やさしい英文法を学びながら英語の発想を理解できるようにしました。

英語のコミュニケーションを行う際に土台となる文法については、ことばによる長い解説をする代わりに、最低限の説明とわかりやすいイラストで解説しました。また、「瞬間チェック」「Gトレーニング」「Speak-Up!」という3段階の問題演習を通じて、直接口に出して言ったり書いたりすることで、学んだ項目を定着させる方式を採用しています。本教科書をご使用になる先生方には、この教科書で学んだ文法項目や表現を使って、生徒が実際にコミュニケーションを図るといった体験を授業中にたくさんさせてください。中学校で学んできた英文法をコミュニケーションやポライトネスの立場から見直し、これまで知っていただけの知識を、場面に合わせて使

るようになることを目標としています。

本課の内容

本教科書の具体的な編集方針と内容紹介に移りましょう。まず、本教科書は英語表現のための「基礎・基本」を確実に習得することを編集の基本としています。そのため、教科書で扱う英語は平易なものとし、使用する例文は短く簡潔で覚えやすいものになっています。生徒が中学校ですでに学んで「知っていること」と、時折出てくる「知らないこと」を交互に織り交ぜています。このようにすることで、生徒に「安心感」を与えつつ、ある種の「どきどき感」を取り混ぜて学習の継続を促しています。

教科書は見やすい見開き2ページの構成で、現場の先生が使いやすいテキストになっています。本教科書は、多くの高校の先生方がイメージしておられる文法シラバスを軸としたライティングと、スピーキングのためのコミュニケーション英文法を理解しながら、自己表現や発表に役立つ英語表現を学べるように作られています。

○インパクトのある「見返しページ」

「前見返し」と「後ろ見返し」には、本課(Lesson 12)でも取り上げているトリックアートが出ています。生徒に興味をもってもらうために、見ている面白いトリックアートを置きました。先生方も額縁の下の文字を解読しながら絵をご覧になり、生徒といっしょになって英語の質問に答えて戴けたらと思っています。

○授業でも独習でも使える「Let's Start」

本課に入る前の「Let's Start」では、アルファベットの復習を行います。つづりを入れ替えて他の単語を作ったり、アルファベット順に線で結んでナスカ

の地上絵を描いたり、イラストの中に見える事物を英単語で書いてみるコーナーが設けられています。続いて品詞と語順についての基礎を再学習し、自信をもって本課に入れるようになっていきます。英語が苦手な生徒も、得意な生徒もこれで準備完了です。

○興味を引く題材

スポーツ、生き物、旅行、環境、世界遺産といった定番の題材から、世界の食文化、芸能、不思議な絵、ご当地、活躍する高校生といった興味を引く話題を取り上げ、メリハリをつけました。また、人気ポップスター、アイドルグループ、トリックアート、書道パフォーマンス甲子園、白いリンゴ、青いバラなど、興味深い写真がたくさん用いられています。例文中に登場する人物の名前でさえ、教科書を使う生徒たちと同じ世代に多い身近な名前を選び、細部まで高校生の目線に立つようにこだわりました。

○「イントロ英会話」

各課の左ページには、各レッスンのトピックに象徴的な事物・人の写真、本課のタイトルに続いて、AとBのダイアログである「イントロ英会話」を配置しました。会話の中で、ターゲットとなる文法項目を使用した表現が太字で示されています。レッスンのトピックや写真に関係のある会話になっています。

○「Let's Listen」

各課の右ページ最上段には、写真を見ながら行うリスニング問題が配置されています。英文を3つ聞いて、右の写真に合うものを選ぶことになっていますが、必ず一つは後述の「セレクト英文法」の項目を使った文になっています。生徒は意識する、しないにかかわらず、基本的な文法項目に馴染んでいきます。

○「セレクト英文法36」

2単位の教科書であることを意識して、何百もある英語構文や文法項目の中から、最低限これだけは覚えてほしいという文法事項を厳選して36個に絞り込み、各レッスンに2つずつ入れました。まわりくどい説明を避け、イラストを使って理解しやすいように工夫しました。どのイラストも英文法の感覚

をそのまま捉えられるように配慮されています。英語学習でつまづく原因になっている、難しい英文法の概念や抽象的な文法用語を避け、イラストを見るだけで楽しみながら基本文法のイメージが理解できるようにしました。

○系統的な反復学習

『セレクト英語表現Ⅰ』の各練習問題は、「セレクト英文法」で学んだことをその場で確認する「瞬間チェック」、「セレクト英文法」や「プラスα」と各課のテーマに沿った問題文である「Gトレーニング(Gトレ)」、会話形式で自分のことを英語で表現する「Speak Up!」という3段階の累積方式で構成されています。「Gトレ」や「Speak Up!」は、本教科書のこれまでのレッスンで学んだすべての知識の確認として位置づけられるもので、必ずしも当該のレッスンの文法項目だけで成り立っているわけではありません。これらの練習問題で習った文法項目を復習し、確実に使えるようにしてください。

○ネイティブが実際に使っている表現を学ぶ

「Gトレ」の後は、「場面でGo!」を用意しました。2択問題を見て、場面に応じた適切な表現を選びます。一例を挙げましょう。外国人に日本語を話すかどうか尋ねるときに、Can you speak Japanese? と言ってしまいがちですが、相手の能力を尋ねるCan you ~? はこのような場面では不適切です。ネイティブなら、Do you speak Japanese? という表現を使うでしょう(Lesson 7)。このように、日本人が思わず言うってしまう表現を挙げながら、微妙な使い分けが必要なことを学びます。生徒に自分の気持ちをよりの確に表現するためには英文法の実践的な知識が欠かせないこと、これまで学んできた英文法が実際に「役に立つ」ことを実感させるコーナーになるはず。1問ごとに、自分が使う英語表現がネイティブ感覚に近づいていくことを実感していただけたら幸いです。

○おもしろい話題が満載

本教科書ではページ最下段を利用して、「英語で何という?」と「なるほどザ☆ワード」というコーナーを設けています。「英語で何という?」は、「セレクト英文法36」の文法項目を使った、言えそうと言え

ない日常表現、名言、ことわざを取り上げています。学んだ表現で、あんなこともこんなことも言えるということを示しています。また、「なるほどザ☆ワード」では、人気の宇宙食、アニメということばのルーツ、鉄人28号の英語名など、題材に即した興味深い豆知識を提供しています。

課間活動の内容

○「Gトレプラス」

本課数レッスンの後に「Gトレプラス」を配置しました。本課の「Gトレーニング」のプラスαとして、「セレクト英文法」の理解をさらに深めるための問題です。傍注には、それぞれの問題のヒントとして、問題解法のためのキーワードと対応するレッスン番号とページ番号を挙げ、該当するレッスンに戻ってすぐに復習ができるようにしました。

○「つなぎ言葉ランキング」

これまでの学校の英語教育では単文の指導に重点を置いてきたきらいがあります。実際のコミュニケーションの場面を考えてみれば、一言だけ言って会話を終えるということはほとんどありません。自分が言ったことに関して、理由を説明したり自分の気持ちや意見を述べたりするでしょう。そんなときに活躍するのが「つなぎ言葉」であり、文章全体にスムーズな流れを作り、ある程度まとまった内容を表現するときに欠かせないものです。このような観点から、「Gトレプラス」の右ページに、本教科書の目玉の一つである「つなぎ言葉ランキング」というページを置きました。ここではよく使われる接続詞を10個(and, that, but, or, as, if, than, when, because, so) 選び、その機能と用法を紹介しています。生徒にとっては意外な「つなぎ言葉」が上位にランクされていたり、馴染みのある「つなぎ言葉」が下位にランクされていたりして、新鮮な驚きを感じるかもしれません。

○新学習指導要領の趣旨を生かした、総合的な言語活動

新学習指導要領の「英語表現Ⅰ」の目標に即して、具体的な言語使用場面を設定し、即興で話したり、目的に応じて簡潔に話したり書いたりするために、本教科書では「Speaking Station」と「Daily

Conversation」という英語によるスピーキング・ライティング活動を設けました。

「Speaking Station」の趣旨は、読んだり聞いたりしながらテーマに沿った情報や知識を取り入れ、自分の考えをまとめ、自分の意見を発表するものです。「発表のための語句」や「発表によく使われる表現」を覚えて、実際に発表の練習をします。これらをスムーズに行うために、Warm Up～Input～My Opinion～ヒント～発表に必要な表現～Short Speechという6つの構成にしました。最後のShort Speechでは、パラグラフ内の語句と語句、文と文の結束性を高める方略として、ポイントを示す語句や文、つながりを示す語句を活用したモデル文やパターンを示しています。このようにして、パラグラフ・ライティングを意識させるようにしました。さらに、この活動をより効果的に行うために、「発表のコツ」でリズムやイントネーション、音のつながりなどの英語の音声の特徴、声の大きさ、話す速度などに関するワンポイントアドバイスをしました。

もう一つの総合的活動として、海外旅行やホームステイをするときに役に立つ「Daily Conversation」を3回分設けました。具体的には、買い物、レストランでの食事、道案内の場面を設定しました。海外旅行での英語は、必ずしも難しい表現を使う必要はありません。中学レベルの英語の知識をどのように有効に活用するかを会話形式で紹介し、それぞれの場面が必要と思われる語句や文を「その他の表現」としてまとめました。

おわりに

『セレクト英語表現Ⅰ』は、現場の先生方が使いやすい伝統的な内容を土台にして、新学習指導要領で示されている総合的・統一的な活動も盛り込みながら、「場面でGo!」や「つなぎ言葉ランキング」などの新しい要素を取り入れた楽しい教科書になっています。最初に述べたように、この教科書の目的は、中学で学んだ基本的な文法項目を学び直し、さまざまな活動を通して、生徒の英語の表現力、発信力を高めることにあります。本書がきっかけとなって、英語への興味が深まり、英語を勉強する楽しさ、英語表現の面白さや奥深さを少しでも感じていただけたら幸いです。

『SELECT English Conversation』の編集方針と内容



拓殖大学 北出 亮

新教科書の編集方針

新教科書『セレクト英語会話』の学習指導要領における目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、身近な話題について会話する能力をやしなう。」となっており、平成19年度に改訂された現在のオーラルコミュニケーションⅠの学習指導要領と内容は基本的にほとんど変わっておりません。科目名は「Oral CommunicationⅠ」から「英語会話」となりましたが、テーマ・題材、言語活動の扱い、文法の扱い、英語での授業は現行と同じ扱いです。従って、新教科書の「英語会話」は現行『SELECT Oral CommunicationⅠ』の編集方針を踏襲致します。

今回の『セレクト英語会話』は1996年初版の『SELECT Oral Communication A』の流れを受け継いだ教科書です。この間、『セレクト』の基本コンセプトとして長年教育現場で大きなご支持を頂いてきた「Key Expression方式」「5段階ステップ式」「コミュニケーション活動」「ワークシート」などの指導法を完全に受け継ぎました。今回の『セレクト英語会話』でも、「授業が進めやすく、教えやすい」「楽しく学べて力がつく」「基本表現を繰り返し段階的に学ぶので、授業がしやすく達成感がある」「教材が充実していて評価がしやすい」という基本的な編集方針にさらに磨きをかけて編集致しました。

追加項目とその対応

新学習指導要領には、現行にない追加項目「海外での生活に必要な基本的な表現を使って、会話する」がありますので、その対応が新しく追加する内容になります。

海外での生活というと、高校生にとっては「留学」が一番可能性が高いと思われます。そこで新教科書

では東西高校の生徒として新に亜紀と拓を登場させ、アメリカへ留学させる「亜紀と拓の留学日記」の物語を作りました。また前見返しは空港の到着ゲートの場面、後ろ見返しはお別れパーティの場面として使用しましたので、アメリカ入国からホストファミリーとの生活、学校での勉強、休日の観光、そして帰国のためのお別れパーティまで留学全体の流れがわかるように致しました。

基本的な会話表現は、イラストで面白く描かれた留學生活の様々な場面の中で、実用的な会話として使われています。会話場面は、本文の「亜紀と拓の留学日記」の中で47例、前後の見返しで25例、合計72の対話文としての会話表現が使われています。

(1)「亜紀と拓の留学日記」

留學生活を大きく 1.ホストファミリーの家 2.食事と手伝い 3.アメリカの学校 4.楽しい休日の4つに分けています。4つの項目はそれぞれ、初対面のあいさつと家の中の案内、食事と手伝い、学校でのランチタイムや休み時間、授業と放課後、さらに市内観光や週末旅行など、具体的な生活場面に分かれています。

留學生の亜紀と拓は同じ高校に留学しますが、様々な留學生活を紹介するため、別行動をとり、ホストファミリーも異なって設定されています。

会話の場面や表現は基本的なものを配置してありますが、学習者の生徒に興味を持たせるため、画面には面白い人物や動物を登場させ、時には少しオーバーに描き、楽しくユーモアのあるイラストを心がけました。

なお、留学の会話だけでなく、アメリカの文化的な背景や地理的な説明を簡単にまとめた「一口コラム」を場面ごとに準備しましたのでご活用ください。

◆亜紀と拓の留学日記2

2. Helping the Family
食事と手伝い

How do you like the meat loaf?
Oh, it's delicious!
Thank you for the wonderful dinner.
I'm glad you enjoyed it.
How does it taste?
It doesn't have much taste.

手伝い

May I help you?
Yes, please. Will you clear the table?
Can you help me do the dishes?
Sure. I'd be happy to.
Thank you for vacuuming the room.
You're welcome.
Do you mind feeding the cat, Taku?
No, not at all. I'll take care of it.
May I use the washing machine?
Sure, go ahead.
Do you want to mow the lawn, Taku?
OK. Show me how to do it, please.

ひとくちコラム
ゲストもお手伝い
英語圏の人々は、ゲストに家族の一員としてリラックスしてもらうことが一番のもてなしと考えています。ホームステイしたら、家族の一員として積極的に家の手伝いを申し出ましょう。

◆亜紀と拓の留学日記4

4. Enjoying Holidays
楽しい休日

市内観光

Where would you like to visit?
The Statue of Liberty and ...
Where's the tourist office?
Sorry, I'm a stranger here, too.
May I have a free city map?
Sure, here you are.
Which tour do you recommend?
How about this special tour?
I'd like to sign up for the city tour.
Certainly. It'll be 80 dollars.

ひとくちコラム
時差があるアメリカ
アメリカの本土は、西から太平洋、山岳、中西部、東海岸の4つの時間帯に分けられ、順に1時間ずつずれていきます。ロサンゼルスは西海岸とニューヨークの東海岸では3時間の時差があり、長距離バスや飛行機を利用して移動する場合は気をつけましょう。

週末旅行

What are some sightseeing spots here?
How about the Art Museum?
Does this bus go to the Art Museum?
No. Please transfer to No. 50 at the next stop.
May I take a picture here?
Yes, but no flash, please.
I'd like a ticket to Boston, please.
Round-trip or one-way?
How would you like to pay, cash or charge?
Cash, please.
May I help you?
I left my bag on the train.

ひとくちコラム
LOST AND FOUND

(2) 前見返しと後ろ見返し

現行版では、日本の空港の発着便ゲートの場面と外国からの日本留学生のお別れパーティの場面が描かれていますが、新版ではニューヨークの国際空港の到着ゲートと亜紀と拓のアメリカでのお別れパーティとなっています。また、現行版にはなかった留学日記の中の一部として連結するストーリー性を入れました。

①前見返し

ニューヨークの国際空港の到着ゲートで、亜紀と拓がホストファミリーとあいさつを交わす場面が描かれています。空港では、荷物受け取り所、税関、手荷物検査、両替、案内などの場面で接触する人達との会話を配置しました。また興味を持たせるため前見返しは、様々な動物（オウム、タコや鴨、カンガルー、ヘビ、ラクダ）や人物（サンタクロース、自由の女神像、カリブの海賊、宇宙人、原始人、飛脚）、そして物（石の貨幣、サンタのみやげ袋、海賊の宝石）がユーモラスに描かれています。留学の導入部分になりますが、楽しく学ぶことができます。

②後見返し

亜紀と拓が帰国するので、そのお別れパーティ会場での会話場面が描かれています。前見返しと同じように人物（リンカーン、自由の女神像、スーパーマン、サンタクロース、カリブの海賊、宇宙人、原始人、飛脚、忍者）や動物（オウム、猫、犬、リス、ハト、トナカイ、ペンギン、鴨）などがユーモラスに描かれています。ここでの会話は、滞米中の感想や思い出、別れのスピーチ、あいさつなどが準備されています。

(3) スターになって自己紹介

スターの写真ですが、新教科書では現行版のイチョー以外は全て差し替えました。生徒が興味を持つように若者の夢と希望を実現している人達を基準に選び、現在の時代の中で、スポーツ、芸能、政治、映画、作家、デザイナー、宇宙飛行士など世界で活躍している人や過去の人でも社会的に活躍した人を中心に掲載しました。生徒と一緒に楽しみながら活用ください。

終わりに

新教科書は現行『SELECT Oral Communication II』から『SELECT English Conversation』に科目名が変わりますが、「使いやすく教えやすく」、「生徒が楽しく学べて積極性が身に付く」「基本表現を繰り返すので無理なく身に付く」「評価がしやすく教材が充実」など、基本方針は全く変わりません。また、新学習指導要領の追加項目には「亜紀と拓の留学日記」を新しく加え、『英語会話』のテキストとしてさらに充実致しました。是非ご活用ください。

最後に、現行教科書、新教科書に一貫して流れる編集方針は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」です。『英語会話』は、文法や、音声上の完璧さを目指すのが目的ではありません。恥ずかしがらずに積極的に話し、発表し、聞くことが最も重要です。英語を話そうとする生徒を励まし、評価し、自信を持たせる指導を先生方へお願い致します。

特集 「新教科書 2」— これからの英語教育

『CROWN PLUS Level 3・4 New Edition』 の特色



東京大学 山本史郎

文法・文構造について

『クラウンプラス』は、プラスという名前が示しているように、「学習指導要領」にプラスαの発展的内容を加えた検定外準教科書です。

文法事項に関して学習指導要領で扱うべき項目は、すべてLevel 3でカバーされています。さらに検定教科書では扱わない発展的な文法事項も含まれます。

例えば、分詞構文では〈接続詞＋分詞〉、〈beingが省略された分詞構文〉、また、文構造では〈There＋助動詞＋be動詞＋主語〉、〈There＋be動詞以外の動詞〉といったものも扱っています。

一歩進んだ文法項目・文構造を取り上げ、高度な英文にも対応できる力を養成するのがねらいです。

さらにLevel 4では、文法的な形式よりも、意味のカテゴリーを中心とした項目を取り上げ、それを表すにはどのような表現があるのだろうかという発想で例文が作られています。

いくつか紹介しますと、「～でありながら…（分詞構文で譲歩・同時性を表す）」、「分詞を用いて、情報をつけ加える」、「前文（の一部）を抽象語でまとめる」といったものがあります。

これらは、Level 3でひと通り学んだ文法事項を別な角度から眺めることにより、英語への理解をさらに深め、定着させようというのがねらいです。

語彙について

次に語彙ですが、学習指導要領では、中学で約1,200語、高校のコミュニケーション英語で約1,800語、計3,000語を学習することになっています。『クラウンプラス』の単語は、Level 3で約3,000語、Level 4ではさらにプラス1,500語あり、3と4を合わせると約4,500語になります。センター試験に必要な語彙レベルはLevel 3でカバー、Level 4で難関

大学にも十分対応できる語彙力を養成できます。

Level 3 改訂のポイント

昨年刊行された『クラウンプラス』の新版Level 3では、授業でより扱いやすくなるようにしました。具体的には、各レッスンの始めにあったGrammar Points（文法の要点）を本文の後ろに移動し、レッスンの導入を、文法ではなく本文に変更しました。

また、1つのレッスン本文を5つのセクションに分け、すべてページ内でパラグラフが収まるようにしてあります。そして、本文の内容を理解しているかどうかをすぐに確認できるように、次ページ（同じ見開き）にTrue or Falseを新設しました。

Expressions（イディオムを中心とした表現）では、生徒に辞書を使って調べさせたり、文脈から類推させたいという声が多かったため、今回から訳を外しました。一方、どこで学習したか、掲載ページがすぐにわかるように、巻末にリストを作りました。

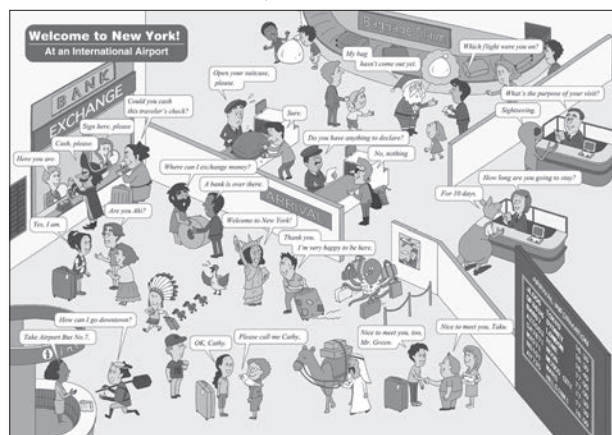
つづいて問題演習に関してですが、Comprehension Checkでは、レッスンの内容を正しく把握しているかを確認するのはもちろんですが、表現する力をつけるように、英問英答の問題を中心としました。

Exercisesは、今までは各文法事項に対応させた確認問題が中心でしたが、今回の改訂でGrammar Pointsの文法項目だけでなく、Expressionsも合わせた文法・表現の総合的な演習にすることで、確認とともに解く力を養う問題に変更しました。

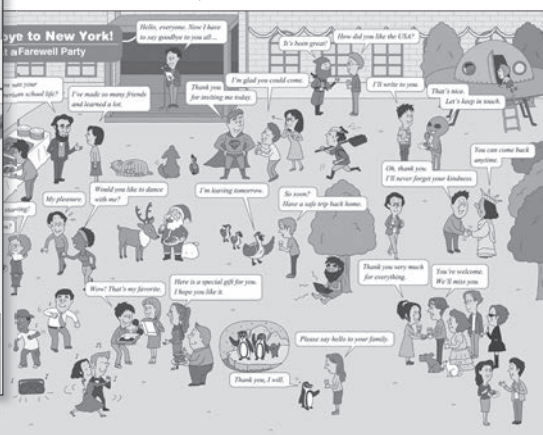
Level 4について

昨年のLevel 3につづき、現在Level 4の改訂作業を行っています。授業で扱いやすくなるようLevel 3と同様の変更を行うとともに、さらに読み応えのある英文ピースを増やし、全12レッスンの新版Level 4となって今年の11月に刊行される予定です。

◆前見返し



◆後見返し



「読むこと」と「書くこと」を接続した授業の展開を考える

広島県立廿日市西高等学校 浅井智雄

1. はじめに

現在、新課程教科書を用いた英語指導が展開されている。これからの英語指導では、素材である英文を、いろいろな角度から提示・定着させて、使える学力をつけることが求められる。本稿では、この点を、読むことの側面から考える。現在、アウトプットに至る一つの段階として、読んだ内容を英語でまとめることはよく行われている。しかし、「まとめる」ための着眼点とその生かし方についてはあまり明確ではないように思われる。目指すべき方向性は、読んで理解した事柄を「用いて」一貫性のある内容の英語を書かせることである。本稿では、そのために「考えさせる」授業の展開を提案したい。

2. 新学習指導要領から読み取れる「読むことと書くことを接続させた指導」のポイント

読むことを中心とした活動に関する内容の項では、「概要や要点をとらえる際は、特に重要な事実等をとらえることを通じ、全体の要旨を理解することが重要となる。」とされている。この中で、「概要や要点」は、英語指導の場面では、常に意識されていることではあるが、明確な形でとらえられているとは言い難い。ここでは、「おおよその内容や全体的な流れ、必要不可欠な情報、書き手の主な考えなどの読む際に見落としはならない重要なポイント」のことである。

書くことを中心とした活動に関する内容の項でも、「情報」・「概要や要点」・「考え」、さらには、「簡潔に書く」という言葉が用いられている。具体的には、読むことによって得られた情報や考えの「概要や要点」を書くよう求めている。大切なことは、「読んだことをそのまま書くのではなく、平易な表現に置き換えたり、情報の順序を変えたりするなどし

て、読み手に分かりやすく伝えるように指導することである。また、「考え」について書く場合の構成上の工夫にも触れている。さらに、書こうとする内容を明確にし、その要点を整理した上で短い文章を書くことを、「簡潔に書く」と定義している。

<指導のポイント>

第1に、両活動を、「概要や要点」・「考え」・「情報」という観点からとらえることである。実際の指導場面では、英文内容の「概要や要点」を把握させなければいけない。そのためには、授業過程の中で、生徒が理解する事柄を、「情報」「考え」と捉えさせる必要がある。

第2に、説明文を読む場合、パラグラフ単位での理解を基本とすることである。そして、パラグラフ構造を理解させた後は、パラグラフごとの「概要や要点」を英語でまとめさせる必要がある。また、英文の展開上、複数の英文を、別の語・語句・英文に凝縮したり、別の英語に置き換える作業も必要である。このように、読むことと書くことを同時進行で行うことにより、部分から全体へと英語を通じた理解が徐々に拡大する。そして、最終的には、それまでの部分的テーマに対する「理解+産出」の積み重ねを材料として、英文全体の中心的テーマを、英語で説明させる。

第3に、上記の第1点と第2点に関する指導をする際の補助教材として、ワークシートを作成することである。生徒が日常的学習手段として活用しているノートには大きな問題点がある。それは、「概要や要点」を把握する形式になっていないことである。例えば、パラグラフ構成の図式化、テーマから見た語や語句の関連性を示すための図式化、内容の要点や論の転換を示す語や語句の明示化、などの概要や要点を把握するための着眼点を、目に見える形でワークシート内に記載する必要がある。

以上のことから、生徒に「考える」ことをこれまで以上に求める必要がある。そして、英文を読み進めて考えさせるのではなく、授業の過程で継続的に、「考える」タスクに取り組みさせる必要がある。

3. 読むことと書くことの関連性について

新学習指導要領では、4技能の統合的指導によって、コミュニケーション能力を伸ばすよう強調している。読むことと書くことを関連づけた英語指導はその一翼を担うものである。ここでは、「読むこと」と「書くこと」を関連づけた指導の効果について、主な研究成果を述べる。第1点目は、読むことと書くことは学習者の「意味の構築」という面で共通点をもつため、両者を関連づけることは、学習者の批判的思考(Critical Thinking)の力の伸長につながることである。(Shen, 2011) 第2点目は、書くことにより、自分が読んだ内容や、自分の読み方を振り返ることができるため、メタ認知的スキルの伸長につながることである。第3点目は、書くことにより、学習者は読み手としてではなく、書き手の立場に立つことができるため、自分が読んだ英文の筆者の意図や英文の概要や要点を理解する段階を乗り越えることになり、自分独自のテキストを創出できることである。(Hirvela, 2004)

4. 新課程教科書「CROWN English Communication I」でどう教えるか

(1) 指導の目標としたいこと

取り上げたいタスクは、Food for Thoughtである。これは、各レッスンの中心的テーマについて説明させることを通じて、PISA型読解力の育成を狙ったものである。このタスクを完成させるためには、単なる言語知識の積み重ねではなく、各セクションの概要や要点をパラグラフ単位でとらえるとともに、パラグラフ間の関連性をしっかり考えることが求められる。そして、このタスクには、英語を用いて一貫性のある文章を作成することを目標としたい。英語で取り組む過程こそ、読むことと書くことを接続させる授業過程そのものであるからである。

(2) 授業過程のイメージ

上記の目標に基づく、各セクションの読むことと書くことの活動とFood for Thoughtの関係性が

ら、下記のような授業過程を考えた。

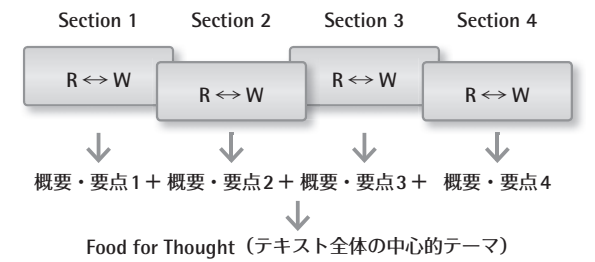


図1 レッスン全体を通じた授業過程のイメージ

(手順1) レッスン全体を構成する各セクションごとに、パラグラフ単位で、読むことと書くことを並行させた指導を行う。大切なことは、この段階で既にテキストの中心的テーマを問うFood for Thoughtの内容を生徒に知らせて、最終ゴールを意識させることである。指導方法としては、英問英答形式が中心となる。その場合、単に情報を抜き出せば答えとなる質問だけではなく、推論を引き出す質問、教科書の情報を統合させる質問も加えるなど、質問を拡大・深化させる必要がある。また、英語の質問とともに、複数行の英文を、別の表現や平易な表現で短縮させたり、情報の順序を入れ替えて、別の英語に移し替えるなどの操作にも取り組ませれば、読むことと書くことを往復しながら、理解をより確実に深まりのあるものにさせることになる。このような過程を経て、各セクションごとの概要や要点を探らせていく。なお、図1の中の各セクションが重なった部分は、それぞれの最初の部分と最後の部分が関連性を保ちながら、テキスト全体の論が進行していくことを表している。

(手順2) 各セクションの概要や要点を把握させる指導後、常に意識させてきた中心的テーマ(Food for Thoughtの内容)を改めて提示する。作成させる前には、英語の質問を通じて、概要や要点に関わるキーワードやキーフレーズを確認させたい。また、黒板に書き出したキーワードやキーフレーズを参照させながら、ペアでお互いに中心的テーマに対する解答を口頭で言わせるなどの事前活動しておく。これらの活動の後、実際に書かせる。この時、教科書とワークシートは参照させる。Food for Thoughtは、テキスト内容を総合的にとらえているかどうかを評価するものであり、総合的思考力の向上が期待される。ぜひ、生徒自身に考える機会を与えたい。

5. 授業の実践

(1) 対象とする素材と授業過程

Lesson 6 Roots & Shootsを取り上げる。レッスン全体を通じた授業の流れを次に示す。

①導入：Take a Moment to Think を利用した背景知識の整理・確認と学習への動機づけ

②展開

- ・英語を用いたレッスン全体の概要紹介 → 音声聴取を通じたテキスト全体のイメージ把握
- ・新出語や語句の発音・意味確認や本文フレーズリーディング等の音読指導（各セクション）
- ・英文の音声聴取による、内容に関する基本的事項の理解度確認（各セクション）

・各セクションごとに、ワークシートを用いて読むことと書くことを並行させた活動を行い、中心的テーマの把握に迫る。（活動前に、中心的テーマを知らせ、学習目標を持たせる。）

・各セクションのキーワードやキーフレーズの整理、ペアでの英語による口頭要約を経て、中心的テーマについて説明する英文を書かせる。

③まとめ：T or F, Q and A等を通じた学習事項の再確認、振り返りシートを用いた自己評価

(2) 読むことと書くことを並行させた活動の具体例ーワークシートの利用

読んだことを書くことに結び付ける過程で、どのように考えるか、そして、どの英文・語句・語に注目すればよいかということを生徒に示す必要がある。そのため、この条件を満たすものとしてワークシートを作成して、この活動で要求される要素を生徒が直接見える形にすることを考えた。左記授業過程の中の枠内の部分が、本稿で取り上げている読むことと書くことを接続させた授業場面である。下記に、Food for Thoughtを考える際に、大きな手掛かりを提供してくれる2つのセクションに関するワークシートの具体的内容を示した。

Section 3	Theme	Leading Questions	Answer	Key Words and Key Phrases
14-34	The idea that everything in nature is connected and its example	1 What situation does it show that everything in nature is connected? (情報抽出型質問) 2 Why does Jane say that humans are in danger of destroying both their environment and themselves? (推論生成型質問) 次の質問を手掛かりにさせる ① What happened in England? ② What does that show?	1 It shows that plants and animals make up a whole pattern of life. 2 ① In England, farmers killed the rabbits because they were destroying farmers' grain. After that, the pattern of life made up by animals around the farmers was destroyed. Finally, rats destroyed the farmers' grain. ② It shows that farmers who killed one kind of animal had their grain destroyed by another kind of animal. In other words, humans' destroying a part of the environment can lead to destroying some kinds of animals and their own lives. (情報の順序の入れ替え+原文の言い換え)	・ a whole pattern of life ・ go wrong ・ rabbits ・ grain ・ farmers ・ killed ・ foxes ・ chickens ・ rats ・ destroyed ・ in danger of ・ environment ・ ourselves
Section 4	Theme	Leading Questions	Answer	Key Words and Key Phrases
23-34	Necessity to use humans' ability to speak and to share ideas to make a big change	1 What is the main difference between animals and humans? (情報抽出型質問) 2 What and how should humans change? (情報統合+推論生成型質問) 3 How should humans use the ability to speak and to share ideas? (情報統合+推論生成型質問)	1 It is that humans can speak and share ideas. 2 Because humans have caused environmental problems all over the world, they should solve them and change this world for the better by intelligence and cooperation and sharing ideas. 6 And you have a choice : What ~ to wear? 7 [a role to play, make a difference, one person, affects small, a thousand ~ people all, make a big change] 3 Humans can solve many environmental problems and make the world a better place because they can speak and share ideas. Such ability is very important to work together to the difficult problems such as environmental problems.	・ difference ・ speak ・ share ideas ・ a role to play ・ make a difference ・ one person ・ affect ・ a choice ・ small ・ a thousand, then a million, finally a billion people

(ワークシートの解説とFood for Thoughtに対する英文作成手順)

Leading QuestionsとAnswerの一部、およびKey Words and Key Phrasesの欄は、あらかじめ記入しておく。また、インタビュー形式であるこのレッスンは、内容面から見て、いくつかのまとまりのある部分に細分化できるため、そのまとまりを段落に相当すると考え、各セクションの下の欄に行数を記入している。生徒には、まずそれぞれのLeading Questionに対する自分の解答を、Answerの部分に記入させる。その時、ワークシート内の下線を施した部分に英語を記入させる。情報抽出型質問に対しては、ほぼ全文を英語で書くことができると思われる。一方、推論生成型質問あるいは、推論生成型と情報統合型を組み合わせた質問に対しては、生徒の負担を考慮して、概要や要点に直接あるいは間接的に関わる部分を英語で書かせるようにする。このワークシートを用いた授業展開の中で、重要な部分は、原文の言い換えの箇所（Section 3、ワークシート内Answer、下線部1～5）、および、情報統合の部分（Section 4内の矢印で示した部分、3か所）である。これらは、教科書の英文・語句・語を、教科書にはない別の英語で書き表わすことを求めている。（注）intelligence, cooperation, work togetherという単語は、生徒がなかなか気づかないかもしれない。その場合は、日本語を補助的に用いて、どのような英語が可能か考えさせたい。また、情報の順序の入れ替え（Section 3）も重要なスキルである。これらの作業を通じて、各部分のテーマ（Theme）まで考えさせる。

以上の学習を経て、Food for Thoughtに対する解答を作成する。その際は、これまでの英語を読んで英語で書くという活動を意義あるものにさせるという点から、英語で作成させたい。また、教科書とワークシートを参照させる。留意させたいことは、教科書やワークシートの英語を部分的にコピーすることを繰り返すのではなく、各セクションの各項目に示されている英語を組み合わせ、一貫性のある構成にしようと努力することである。Food for Thoughtの内容は下記の通りである。

Everything in nature is connected. という表現がもっている意味いはなんでしょうか。本文の内容にそって考え、説明しましょう。

解答を作成する場合、例えば、次のような構成が考えられる。

① Everything in nature is connected. という表現が表す状況 ※ワークシート内Section 3 14-34のLeading Question 1を利用
② 人間が①で述べた状況を破壊していることとその実例 ※ワークシート内Section 3 14-34のLeading Question 2を利用
③ 人間の手による自然環境破壊を食い止めるための方策と将来の見通し ※ Section 4 前半部分のRoots & Shootsの取り組みについて言及 ※ワークシート内Section 4 23-34のLeading Question 1～3を利用 ※人間とチンパンジーの違いに言及する場合、Section 2の内容にも若干触れたい

この構成をパラグラフ構成の視点から見た場合、①がトピックセンテンス、②と③の方策が展開文、③の将来の見通しが結論文に相当すると考えられる。（注）この3つの語および語句は、ワークシートのSection 4の中の6、7、8の英語をそれぞれ置き換えたものである。

6. 終わりに

新課程教科書で扱われている英文は格調が高く、論理性に富んでいる。高校生の知的好奇心を刺激し、思考力を鍛えるに十分値するものである。理解した事柄を利用して、一貫性のある内容の英語を書くことができる、あるいは、書こうと試みることにより、学習者は、物事を深く考える力や英語で書かれた情報を整理する力、さらには、英語を用いた自己表現力を鍛えるきっかけをつかむことができると信じたい。

【参考文献】

Hirvela, A. (2004). Connecting reading & writing in second language writing instruction. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.
Shen, M. Y. (2011). Reading-Writing connection for EFL college learners' literacy development. *Asian EFL Journal*, 11, 1, 87-106.
文部科学省. (2010). 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』. 開隆堂.

入試探訪 [英語]：素材と設問から学ぶ — 高校入試と大学入試の相関 —

龍谷大学附属平安中高等学校 校長補佐 平井正朗

様々な分野で国内のリーディング・ポジションにある東京大学の入試問題は、ある意味、高校入試作問においても大きなウェイトを占めているのではないと思われる。本稿では大阪府立進学指導特色校文理学科を事例に考察した上で私見を述べる。

文理学科の入試問題は英語Bに位置づけられており、グローバルビジネス科、英語科、国際教養科、グローバル科と同じカテゴリーで100点満点である。全体を概観すると英文のReadabilityは英検準2級もしくは高1レベル、量はパラグラフ・リーディングと速読力を要するものであり、読解力・作文力の差が得点率に反映するものとなっている。また、随所にセンター試験や東京大、京都大などの入試を想定しているかのような設問形式も散見されるので、中学3年生でもかなり英文を読み込み、問題慣れた生徒でなければ難しい。

ジャンルの比率は読解が76.0%、リスニングが24.0%であるが、読解問題では英作文50%、要約

18.4%、補充及び内容真偽13.2%、整序5.3%であり、英語表現力がポイントとなっている。文法事項は分詞の後置修飾、間接疑問、接触節、比較級・最上級、不定詞、受動態など、頻度の高い項目は固定化しているが、一文中に複数項目がからみあう応用問題が多く、ケアレスミスに注意したい。3カ年の比較はI(下の表)の通りである。

東京大学(前期)の入試問題と比較してみると、質の違いこそあれ、II(右ページの表)における[]が共通項、[]は出題年度である。

東京大学の入試対策のシラバスの方向性を考えるとIII(右ページの表)のような視点が導けるが、行きつくところは国際社会に通用するグローバル・リーダーズ育成ということになる。

文理学科の対話文読解では、3カ年を通じてグローバル・リーダーズ育成というタテ糸的視点、2011と2012は異文化理解、2013は日本文化の発信というヨコ糸的視点が垣間見れる。2011は、日米文化

I 文理学科入試問題の3カ年比較

年度	概要
2011	問題1 読解：対話文読解 [28点] ⇒ テーマ「俳句と周期ゼミ」 問題2 読解：スピーチ原稿読解 [41点] ⇒ テーマ「地図」 問題3 英作：課題英作文 [16点] ⇒ テーマ「図表読み取りと部活動について」(約40語) 問題4 リスニング [25点] (A・B問題共通)
2012	問題1 読解：対話文読解 [40点] ⇒ テーマ「観察：モーニンググローリー」 問題2 読解：スピーチ原稿読解 [55点] ⇒ テーマ「メディアからの情報収集」 * 課題英作文を問題2に吸収 英語リスニング [25点] (A・B問題共通)
2013	問題1 読解：対話文読解 [32点] ⇒ テーマ「コウノトリ」 問題2 読解：スピーチ原稿読解 [44点] ⇒ テーマ「大阪産(もん)」 英語リスニング [24点] (A・B問題共通)

II 東京大学(前期)入試問題との比較

- 第1問 **要約** [70～80字、2011～13] / **段落整序** [2011～12]
文脈把握 [2011] / **空所補充** [2013] * One Paragraph One Idea
【ポイント】 速読を通じたパラグラフ・リーディングとcontext把握力、日本語表現能力
- 第2問 **課題英作文** [2011] / **語彙類推** [2012]
自由英作文 [50～60語、2011～13] * 英検2級の2次面接を想起
【ポイント】 背景知識に基づく複眼的視点から自己表現する力
cf. 京都大学：英訳 [2011～13]
【ポイント】 日英語の高度な翻訳力
- 第3問 **リスニング** [約30分、パート3] * 各パート450～600語程度
【ポイント】 レクチャー、ディスカッションを速聴できる力
 過去問題活用と聴きながら推論する力(記述含む) * 2013 ディクテーションは消滅
- 第4問 **文法** [2011～12] / **語句整序** [2013] / **和訳** [2011～13] / **内容説明** [2013]
【ポイント】 正確な文法知識と文構造分析力 * 取り除くべき語を指摘する問題あり
 本質や真理を探究する素材
cf. 京都大学：抽象度の高い英文和訳 [2011～13]
【ポイント】 ハイレベルな文構造分析力+contextに応じた和訳
- 第5問 **長文総合問題** * エッセイから例年の小説に戻った
cf. 2013 テーマ「子供の頃に会った霊能力者の女性」(設問数減少)
【ポイント】 情報処理能力と柔軟性、総合力

III シラバスの方向性

- ① Reading : 専門分野に関する原書や論文、英字新聞などを精読、速読できる力
- ② Writing : エッセイを論理的な英語で書ける力
- ③ Speaking : 課題発見、解決に向けて自分の考えを英語で述べる力
- ④ Listening : レクチャー、ディスカッションを理解できる力
- ⑤ Testing : 専門分野に関する背景知識、論理的思考力、課題発見・問題解決能力

比較と相互理解をテーマに、俳句と松尾芭蕉から導入を図り、蝉の声と季語をキーワードに日本文化理解へのアプローチと同時に、周期ゼミの発生理由をトピックにアメリカ文化と対比している。2012は、日本とオーストラリアの文化比較と相互理解をテーマに、雲に魚の名前を使う事例として、日本のうろこ雲、いわし雲、さば雲、オーストラリアのa mackerel skyを列挙し、雲と天気の間接関係をキーワードにモーニンググローリーを例示、オーストラリア文化理解を促している。2013は、日本文化の発信

を柱に、ドイツ人留学生との相互理解に向けて、コウノトリをキーワードに、野生のコウノトリの絶滅に伴う保護活動や名前のプラスイメージを具体化している。すべてグローバル・リーダーズ育成で円環している点に着目したい。

一方、東京大学ではアカデミックなレベルでグローバル・リーダーズ育成の萌芽が感じられる。2011は科学教育の現状課題として、学科ごとにその歴史と方法論を中心に教育が行われていることを指摘し、あるべき姿として、学生が頭の中で知識が

体系化されるような内容中心の、例えば、時間を一つの枠組みとして教える必要性を提示している。また、2013では、クモの巣が外部の力の強さに応じて反応する柔軟性を持ち、局所的に破損しても全体は機能し続け、その原理が耐震建築や安全な通信網の構築に応用できる可能性があることを示唆している。2012では、多くの先進国における移民の増加に伴い、国民性の分裂が危惧されてはいるが、通信技術の進展により故郷の家族や友人と絆を保つことができ、その絆が地理的に隣接しない新たな社会を創出しているというプロット、また、ニューヨークに住むインド人女性が3歳の娘に母国の伝統を伝え、民族性を示すために1カ月だけサリーを着るというストーリーも興味深い。

＊

現場に目線を移すと、中高ともに長文読解を中心とする設問対応の入試情報はあがるが、英作文となるとどうやって勉強してよいかわからないという生徒が多いように思われる。英語表現力を測定する場合、与えられたトピックについて自由に書く「トピック指定」（自由英作文、テーマ英作文）、場面や状況など、指定された条件に応じて書く「条件指定」、空所で与えられた語句を整理する「文構造理解」に分類されるが、圧倒的に多いのが「トピック指定」である。

東京大学の英作文においては、2011はIt is not possible to understand other people's pain. について、2012は「もし他人の心が読めたらどうなるか、考えられる結果」について共に50～60語の英語で記すという内容であった。2013から新しい出題形式も加わり、英検2級の2次面接を想起させるような写真に写る二人の人物の会話を自由に想像して、60～70語程度の英語で記すという問題と「これまで学校や学校以外の場で学んできたことの中で、あなたが最も大切だと思うことは何か、またそれはなぜか。」を50～60語の英語でまとめる問題が出題されている。文理学科では2013を例にとれば、大阪と日本の農業産出量に占める野菜の割合を30語程度、また、本文中のI hope that more people know about traditional vegetables made in Osaka and eat them. について、どのようなことをすればよいか、自分の意見を20語程度の英語で述べるというものであったが、計16点にも及ぶ。英作

文については、設問形式のバリエーションはあるが、高校及び大学入試共に現代社会に生きる青少年が関心を寄せてしかるべきテーマが選ばれており、日々の授業における素材選びのヒントが隠されているように思われる。できるだけ早い段階から1文から2文、2文から複数文、複数文からパラグラフへと段階的にレベルアップさせていき、その中で結束性や一貫性を意識した指導を織り交ぜながら、つながりをもたせた文章を書かせるコーチングが必要である。同時にブレインストーミングによって書こうとしていることを整理し、それをまとめてパラグラフ化する習慣も身につけさせたい。

＊

世界が求める学力観、言い換えれば、「チーム・グローバル」におけるシンクロニシティ（共時性）が叫ばれる昨今、高度専門分野で働く外国人の日本素通りに代表されるわが国の島国学力観は、国際競争力（IMD）、世界大学ランキング（THE）などを調べれば一目瞭然である。グローバル化の波に乗り遅れた日本企業は、「選択と集中」による収益直結の経営戦略を通じて「ガラパゴス化」を打破しようと懸命である。世界の英語学習者が20億を超え、Return on Englishの時代、アジア成長に伴うEnglish as an Asian Languageやグローバルビッシュの普及が加速化され、社内英語公用語化も珍しい光景ではなくなってきた。

EFL環境での英語教育のあり方を展望すると、国際社会に通用する人間力育成をキーワードに学習者自立、探求意欲、背景知識、ロジカルでクリティカルな思考力、問題解決能力、プレゼンテーション能力、アイデンティティ育成などを視野にいれ、コミュニケーション能力育成と受験学力の両立に努めていかなければならない。

高等学校においては、「授業は英語で」をキーワードに、Can-do statementsとそのPDCAを基盤にTeacher-centeredからInteraction中心の授業展開へ転換がなされようとしている。50分授業のほとんどが日本語で行われている現状から生じる英語で英語を処理できない状況、つまり、漢文処理と同じGrammar Translation Method脱却へのメッセージである。学校の主役が生徒であることを考えると、「授業は英語で」の意味は、生徒のために英語を積極的に使う教員の姿勢とも言える。これは中高とも

にあてはまる。勿論、授業全体をすべてEnglishにするとというわけではなく、Exposure、Experienceの中で英語を用いるということ、例えば、前時内容を盛り込んだ授業前のsmall talk、パラフレーズ、絵などからのアプローチもその一例であろう。

少子化、経済不況、学力低下という趨勢の中、アラウンド・ゼロ世代（2000年前後に生まれた世代）に向けて、文科省から英語力向上のための「5つの提言」がなされ、「小中高を通じた英語教育強化推進事業」が提示されている。また、大学における英語教育も転換期を迎え、英語による専門分野の授業、原書を大量に読み、英語によるグループ・プレゼンテーション、グループ・ディスカッション、ディベート中心の授業、英文記述式の定期試験など、様々なイノベーションが行われているようであるが、中高で伝統的な文法訳読に慣れ親しんできた学生にとって、大学での授業に慣れるまでたいへんだという“声”が聞こえてくる。

「ビジネスで役に立たない受験英語」にメスが入り、TOEFL活用、意欲や能力、適性などを総合的に評価するセンター試験、学力偏重型の「サイコロ」入試からの転換が検討され始めている。また、グローバル化に伴う需要拡大、新学習指導要領施行、単語数増加、高校におけるオールイングリッシュ等の影響で、語学ビジネス市場も上向きと聞く。我々、中高現場では、教室での経験を振り返り、自分の指導に対する理解を深めることにより成長を志向するリフレクティブ・プラクティスが必須となる。慣れ親しんだ指導法から一歩踏み出して新たな指導の型を創り出す努力、即ち、マイナーチェンジでよいから生徒のために地に足がついた指導ができるかどうか問われているような気がしてならない。

筆者の場合、未知語の類推も含め、言葉の意味を説明したり、表現を言い換えることができる力、スキミング、スキミング、多読の活用などを通して、読んだ内容を簡潔にまとめることができる力、文と文のつながり、パラグラフとパラグラフとのつながりをしっかりとおさえ、まとまりのある英文を書くことができる力、質問、応答、同意、反論等も含めてまとまりのある英語を聴き、話すことができる力の育成を念頭にいたシラバスを勘案することになっている。

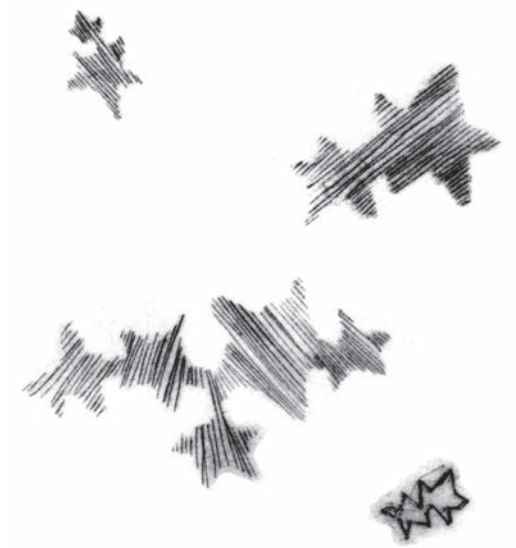
技能統合型の評価方法として、定期考査における

聴解力測定では、インタビュー形式のOral Proficiency Interviewやディクテーション・テストを導入した。読解力測定では、多読力・速読力に重点を置き、ダイアグラムやヴィジュアルな図や絵など、言語外の文脈に置換するPragmatic Mapping Test、作文力測定では、共通テーマに基づく自由英作文を課し、採点基準を明確化すると同時にネイティブ・スピーカーを含む複数採点という取り組みも模索している（テクニックで正解が得られる部分英作ではなく、context重視の完全英作による整序など）。

小学校では、年間35コマ×2年間、ALT加配も伴い、ListeningとSpeakingに力点を置く分、中学校におけるReadingとWritingとの連携が必要となってくる。また、高校においては、中高接続と導入のあり方、「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の連動と評価基準など、様々な検討事項が浮上してくる。到達目標を明文化したシラバス作成と素材選び、アウトプットにおけるラウンド的指導展開、内容理解と語彙やForm学習との連動、Assignmentの組み立てなど、さらなる精査を積み重ねていきたい。

〈参考文献〉

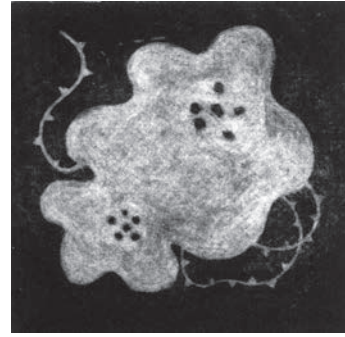
『2012年受験用 全国大学入試問題正解 英語（国公立大編）』旺文社
 『2013年受験用 全国大学入試問題正解 英語（国公立大編）』旺文社
 その他、新聞、予備校ホームページ等で公開された入試問題を参照した。



センター試験の 分析と対応

渡辺 聡

東京学芸大学附属特別支援学校



① 2013年度「筆記試験」の分析と対応

1. 全体的な傾向

今年のセンター試験[筆記]でもコミュニケーション能力と読解力を試す出題がされた。設問形式が若干変わった箇所があるが、全体的な傾向は変わっていない。レベルとしては例年通り基本的な問題が多く、平均点は119.15となり、昨年度124.15、一昨年度122.78と比べ低くなった。第2問～第3間で語数が昨年度より200強増加し、総語数は昨年度に続き増え、4,000語を超える分量になっている。

コミュニケーション能力をみる問題としては、
第1問A：単語をきちんとした音で発話する能力
第1問B：単語を正しいアクセントで発話する能力
第2問B：対話がスムーズに流れるよう、適切な発話を考える能力
第3問A：初出の単語や表現でも、全体の流れから意味を類推する能力
第3問B：発言の内容を要約する能力
が、例年通り求められている。

また読解力では、
第3問C：パラグラフ単位で、文章の構成を論理的に思考する能力
第4問：グラフや表、説明文を参考にして文章を正確に読み取る能力
第5問：映画紹介サイトに投稿された感想を読み、英文やイラストを正確に把握する能力
第6問：論説文の流れを正確に追い、論の展開をつかみながら長文を読み取る能力
が、試される。いずれも文章の全体的な流れをつかんだ上で、的確な情報を読み取る日頃の学習姿勢が問われる。

2. 具体的内容分析

<第1問>

形式、解答数は昨年度と変わらず。問題数がAで1問減り、Bが1問増えた。

A 発音 (6点：解答数3)

基本的な単語の発音(母音字1問、子音字2問)を問う問題。カタカナにしたときの音に惑わされやすい語(medium、meter〔問1〕)も出題された。昨年度に引き続き黙字(t〔問3〕)が出題された。

B アクセント (8点：解答数4)

単語のアクセントのある箇所を問う問題。昨年度と同様、2、3、4音節の語が出題された。昨年度あった見出し語はなくなった。例年通り、カタカナにしたときのアクセントに惑わされやすい語(percent、success〔問1〕、energy〔問2〕、dynamic、hamburger〔問3〕、operator〔問4〕)も複数出題された。

<第2問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A 語彙、語法、文法 (20点：解答数10)

語彙、イディオム、動詞の用法等を判断する問題。対話形式での出題はなかった。動詞の用法を問う問題(must have＋過去分詞〔問3〕、will have＋過去分詞〔問4〕、suggest that＋S＋仮定法現在〔問5〕)は頻出である。イディオムやコロケーションの力を併せて要求する問題(consist of〔問6〕、put up with〔問8〕、keep an eye on〔問9〕、turn～down〔問10〕)も相変わらず多い。基本的な動詞やスペリングの似た語、関係詞、不可算名詞や同義語等の幅広い知識も合わせ持っておきたい。

B 対話文完成 (9点：解答数3)

対話文を完成させる問題。発話数はすべて4つ。

空欄で何を言っているのかを次のせりふから導く(I think inexpensive bags are just as good,からI don't think brand-name goods are worth the money.を〔問3〕)。日常生活でよく使われる表現(hand in、be due〔問1〕、be worth〔問3〕)に慣れておくこと、2人の関係(先生と生徒〔問1〕、意見の相違(TomはHirokoと同意見〔問3〕)等)にも気を配りたい。

C 語句整序 (12点：問数3、マーク数6)

各文の中に含まれる語彙・語法を使い、最も適当な文を完成させる問題。対話形式が1つ増え、2問になった(昨年度は1問)。動詞の用法は毎年問われている(owe～to…〔問2〕)。比較(three times as～as…〔問1〕)、enoughの使い方〔問3〕等、文法の知識も併せて確認しておきたい。

<第3問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A 語やフレーズの意味類推 (10点：解答数2)

単語やフレーズの意味を全体から類推する問題。対話やパラグラフの中でどのように論が展開しているか、状況が推移しているかを正確に読み取り、ヒントとなる語(句)を探して想像力を働かせる。

B 発言の意図の要約 (18点：解答数3)

3人の発言の要旨を選ぶ問題。ある事柄を別の表現で言い換えてまとめている(It=desert-style rock garden) looks great, but more importantly, doesn't need much care.をa desert-style garden is better because it is more economicalで〔空欄30〕、we could use rocks(中略)to create a cooler impression. Some desert plants offer shade as well as beauty.をit is possible to create a refreshing space with a rock gardenで〔空欄31〕)ことが多いので、発言の主旨を理解し、まとめる柔軟な読解力が必要とされる。

C 適文補充 (18点)：解答数3)

指定された空欄に、選択肢で与えられた適切な文や文の一部を補う問題。

選択肢の文中、及び挿入箇所前後の代名詞や指示語、接続する語(句)に注意を払い、論が正しく展開するように当てはめていく。〔空欄33〕では直後にFor example、があるので、その具体例を説明する文を選ぶ。

<第4問>

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

A グラフ読み取り問題 (18点：解答数3)

本文と表を参考に、展開される論からの確かな情報を得る力を問う問題。本文で得た情報を順次表に当てはめ、One of the～やAnother～といった語からポイントを整理していく。〔問3〕は本文からだけでなく、表からも情報を得なければならない。

B 広告読み取り問題 (15点：解答数3)

広告から適切な情報を読み取る問題。設問を読み、与えられた条件をもとに、合致する情報がどこにあるのか探し出していく。問いに関する情報は上から順に出てくるわけではないので、設問の求める情報がある箇所(複数の情報を合わせる場合もある)を的確につかむことが大切である。

<第5問> (30点：解答数5)

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

2人の発言から、事実の確認とそれぞれの感想の違いをとらえる。ここでも、本文のAnyone who loves the book can still enjoy this movie, and if you love the movies, go read the book too!が、選択肢ではAfter watching the movie, Satoko thought that it made her like the book even more.〔問1〕に、本文のI usually avoid foreign language movies as I find it difficult to read the subtitles and pay attention to the scenes at the same time.の意図が、選択肢ではJoe expected that it would be hard for him to follow the story.〔問2〕と言い換えられている。それぞれの発言から、ある事項に対する考え方を丁寧に拾い上げる力が求められる。

<第6問> (36点：問数6、マーク数10)

形式と問題数、配点は昨年度と変わらず。

各段落の趣旨をまとめる問題と、論全体の意図を問う問題が例年通り出されている。各パラグラフのポイントをつかみ、論がどのように展開し、筆者の主題の要点は何か、という広くかつ深い読解力が求められる。また、正解の選択肢は本文で使われていない単語や表現で求められる場合も多いので、基本的な類義語を理解する力も必要である。

3. 昨年度から変化のあった点

- ①総語数は200語強増加し、昨年度に引き続き4,000語を超えた。特に増えたのは第2問が約50語、第3問が200語弱である。
- ②第1問Aの設問数が4から3になった。
- ③第1問Bの設問数が3から4になった。
- ④第1問Bの見出し語がなくなり、一昨年度同様、第一アクセント（第一強勢）の位置が、ほかの3つと異なるものを選ぶ形になった。
- ⑤第2問Aで対話形式がなくなった。
- ⑥第2問Bの対話の数が、一昨年度同様、すべて4つになった。
- ⑦第2問Cでマークする箇所が2番目と4番目になった（昨年度は2番目と5番目）。
- ⑧第2問Cで対話形式が2つになった。
- ⑨第3問Cでイラストが載った。
- ⑩第4問Aのグラフが表になった。
- ⑪第5問のイラスト問題が、適切なものを選ぶものではなく、順番を問う形だった。
- ⑫第6問で段落構成を問う問題の解答数が、4から5に増えた。

4. 日頃の学習で大切なこと

①多面的に語彙を増やす

ただ単に単語の1つの意味だけを覚えるというのではなく、英語での定義、反意語、同義語、接頭辞・接尾辞、品詞の転換、自動詞・他動詞等、語彙を様々な方法で多面的に増やしたい。語彙に関連性を持た

せると、未知の語に遭遇したときにも想像力を働かせてなんとなく意味がつかめるようになる。また、カタカナになっている語の英語と日本語の意味の差異や、発音・アクセントに注意して覚えるのも1つの方法であろう。

②英語を聞き、自ら口にする

アクセント・強勢・構文（主語と述語の区切れや省略等）に注意を払って日頃から英語を聞き、音読をする。単語一つひとつの音に注意を払い、そして文全体の内容を理解しながら読み進む。何回も繰り返して読み込んでいけば、なによりも英語の音に対する興味・関心が必ずや増し、同時にリスニング試験の対策にもなり得る。

③論理展開を重視した読解力を養う

どんな読み物でも最後まで通して読み、論の展開がどのようになっているかをパラグラフ中心に考える。接続語を手掛かりに、パラグラフがどのように構成されているか、全体の論調を捉えてから各パラグラフのキーセンテンスを探し、自分のことばで要旨をまとめてみる。「木を見て森を見ず」にならない大局的な読み方を心がけたい。

④多読を心がける

80分で4,000語を超える分量の英語を読みこなすには、普段から500～1,000語の文章をある程度のスピードで読むことを習慣とすることが大切である。授業では精読を中心に行っているが、時には様々な分野、テーマ、形式の、比較的易しい文章に多く触れるような機会を与え、分量をこなす読み方も覚えさせたい。

II 2013年度「リスニング試験」の分析と対応

1. 全体的な傾向

過去5年間ほぼ同じ出題形式である。解答数、配点いずれも昨年度と同じである。読み上げられた総語数は昨年度とほぼ同じ1,100語強であった。読み上げ速度は昨年度とほぼ同じで自然な感じであるが、音声面でのリダクションもあり、聞き取りにくい箇所もあったと思われる。問題音声は設問ごとに2回流された。比較的素直に英語の内容を問う基本

的な問題で、平均点は31.45（昨年度24.55、一昨年度25.17）となり、過去6年間で一番高くなった。内容はいずれも生徒の日常生活や学校生活の中で起きうる身近な話題がテーマになっている。

2. 具体的内容分析

<第1問>対話ビジュアル（12点：解答数6）

●男女2人の対話を聞き、適切なイラスト、数字、単語を選択する

●各対話の総語数：30語前後

イラストを選ぶ設問2問、数字を選ぶ設問2問、単語を選ぶ設問1問、表を選ぶ設問1問であった。例年出題されていた、図から適切な場所を選ぶ設問の代わりに、適切なはがきの文面を選ぶ設問があった。選択肢は単語のみで、文はなかった。最初のせりふで状況を大まかに把握し、求められる情報を的確に探し出す。対話に出てくる語（句）や数字がそのまま答えになるとは限らず、簡単な計算をする設問もある。キーワードは2番目～4番目のせりふに出てくる。一部を聞き逃すと正答にたどりつけない設問（something larger〔問3〕）や日常生活で使われる単語（a two-story house, solar panels〔問1〕）、計算を伴う設問（下記下線部参照）も出てくるので、集中して聞く姿勢も問われる。

問4

Woman: How's the soccer game going?

Man: Well, the Bears have two goals, but they're behind.

Woman: There're 14 minutes left. They still have a chance.

Man: Yeah, two more goals to win the game!

<第2問>対話応答補充（14点：解答数7）

●対話を聞き、最後の発言に対する相手の応答を選択する

●各対話の語数：約20～50語弱

相手の述べたことへの自然な反応を考える。昨年度同様、最後の発言が疑問文の設問も2つあった。最初の2つのせりふから、会話の場面や状況を想像できるようにしたい。また、How about～?（読み上げ文）〔問7〕、turn in、Thanks for reminding me.（読み上げ文）〔問11〕等、日常会話でよく使われるフレーズは頻出である。会話のやりとりの内容から、相手の発言に賛成（好意的）／反対（批判的）であるかがわかると正解にたどりつきやすくなるし、マナーとしての相手に対する気遣い（下記下線部参照）も知っておきたい。

問13

Man: If you're free this weekend, do you want to go to the beach?

Woman: I wish I could, but my parents are coming to visit.

Man: Oh, OK. Maybe next time.

選択肢

- ① I had a good time.
- ② Sorry to hear that.
- ③ Thanks for asking.（正解）
- ④ You're welcome.

<第3問A>対話内容Q&A（6点：解答数3）

●対話を聞き、その内容についての問いを読み、答えを選択する

●各対話の総語数：50語弱

5W1Hで始まる質問の答えを対話から探す。せりふの数は昨年度は8つのものが出題されたが、今年度は一昨年度までと同じ、5つか6つのみになった。対話を最後まで聞き、状況や流れの変化をきちんととらえる。事前に質問と選択肢の中のキーワードを読みとり、最初のせりふを聞いた段階で場面が想像できるようにしたい。話者が相手に同意しているのかそうでないのかといった話の流れをつかむ力とともに、選択肢のOne that is very simple〔問15〕がせりふのa phone that dials and ringsの言い換えであることを理解する力や、せりふのOK, I'll come back on Monday. が茶のジャケットを買うつもりであることを指す（下記下線部参照）といった話者の意図を正確につかみ取る力も求められる。

問16

Woman: Do you have this style of jacket in size 11?

Man: I'm afraid there aren't any brown ones left in that size. But we have this red one.

Woman: Umm...it's too bright for me.

Man: More brown ones are coming in next Monday.

Woman: Elevens, too? OK, I'll come back on Monday.

質問: Which of the following is true about the woman?

選択肢

- ① She can't wait until next Monday.
- ② She doesn't like the style of the jacket.
- ③ She prefers a brown jacket.（正解）
- ④ She thinks she would look better in red.

<第3問B>対話ビジュアル (6点:解答数3)

●対話を聞き、その内容からわかることを表の空所に埋める

●対話の総語数: 約100~150語

聞き得た情報を図表に当てはめていく。選択肢の数字がそのまま読まれるとは限らないし(表の数字の3.7%は only about four percent (読み上げ文)、問いには必要とされない情報 (Russia, UK, Canada からの留学生の数字) も出てくる。また、the US sends the fewest of the three を聞き取れないとUSが解答欄①と②のどちらに入るのかわからないので、表に載っている情報を正確に読み取る力も要求される。情報は上から順に出てくるとは限らないので、最後まで注意深く聞くことも必要である。

<第4問A>

Short Passage 内容Q&A (6点:解答数3)

●Short Passageを聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

●各せりふの総語数: 100語弱

質問文から事前に推測した状況をもとに、出てきた情報を一つ一つ積み重ねていき、求められる情報を整理する。選択肢では答えとなる語を別の表現で言い換えたり、まとめることがある場合 (Soon, Angoras became popular outside France and could be found throughout Europe by the end of the century. (読み上げ文) を Europeans outside France began keeping them as pets. に [問20]) も多いので、要点をつかむ力も求められる。

<第4問B>説明文内容Q&A (6点:解答数3)

●説明文を聞き、その内容についての質問を読み、答えを選択する

●説明文の語数: 200語弱

質問文に目を通し、事前にどれだけの状況を想定できるかがポイント。本問題では3つすべての質問文に collecting とあるので、英語を聞く前にキーワードはわかる。あとは話の流れに沿って順に問題に当たっていく。全体の内容を総合的に理解する力と、求められた情報を正確に取り出す力が必要とされるが、ここでも選択肢では答えとなる箇所が別の表現で言い換えられる (It (=your collection) may take over your home が Collections may take up too much space. に [問23]) ことが多い。話の流れが変わったり固有名詞が出てくる場合もあるの

で、メモを取りながら質問されるポイントの個所を絞って聞くことも大切である。また、1回目と2回目の読み上げの間に約45秒のポーズがあるので、情報が出揃った段階で各問の答えを絞り、2回目は確認の作業に当てたい。

3. 対応のポイント

①状況・場面を想像する力を育成する

事前に問題指示文、選択肢、イラスト、状況説明文等に目を通し、内容を推測しておく。聞く前に精神的なプレッシャーをできるだけ少なくしておくことも正しい聞き取りへの第一歩である。

②英語特有の表現に慣れる

話の展開がつかめれば意味がわかる表現でも、in that case [問6]、What about you? [問9]、be supposed to [問11] のようなフレーズは聞けるだけではなく、意味が自然に頭に入るまで聞き慣れておくようにしておきたい。

③対話の流れや方向性をつかむ

最後の発言に対する相手の応答を考える場合(第2問)、それまでの話の流れを理解し、これからどのような展開になるのかを推測する能力が求められる。その際、途中で展開が変わり、最初に出てきた情報が最後まで同じとは限らない。方向性を予測した上で、最後まで丁寧に流れを確認したい。

④言い換えの表現を読み取る

リスニングと言っても選択肢を読み取る力は筆記試験同様に要求される。聞き取る英語の表現がそのまま選択肢に入っているとは限らず、ある表現を別の形で言い換えてある場合も多くある。正答の鍵となる情報をきちんと整理する力もつけておきたい。

⑤全部完璧に聞き取れなくてもよしとする

筆記試験で、英文を一字一句完璧に理解する必要がないのはリスニングにおいても当てはまる。リスニングでは、聞き取れなかった箇所でも悩まんでしまうと次を聞き逃すことになる。たとえ理解できなかった部分があってもそのまま流し、「残りからさかのぼって推測すればいい」と思うくらいの余裕が欲しい。

CROWN クラウン総合英語 第2版

採択No.1教科書CROWNの代表著者が編集した
最強の総合英文法参考書!

霜崎 實 [編著] 1,523円

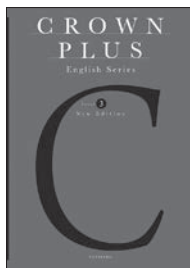
A5判/オールカラー・648頁(本文608頁,解答40頁)



- 基礎から発展まで重要事項を網羅。
- 理解をさらに深める豊富なコラムを収録。
- 導入編・基本編・発展編の学習しやすい3段階構成。
- 重要事項が見つかりやすい機能的な紙面デザイン。
- 生き生きとした例文, 要点を押さえた解説。
- 大学受験に, TOEIC・英検対策に最適。

CROWN PLUS English Series

中高一貫教育にも対応した中高生向け英語テキスト



New Edition

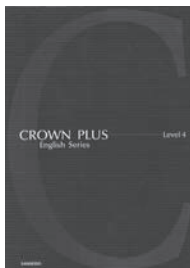
CROWN PLUS Level 3

高校学習指導要領改訂に伴う新版テキスト 主対象 高1・高2

B5判/2色刷・208頁 1,155円◆

[付属教材] WORKBOOK 630円◆/リスニングCD 1,575円◆

[指導書] 6,300円◆ <指導用CD2枚・CD-ROM1枚付>



CROWN PLUS Level 4 主対象 高2・高3

Level 3 の上位に位置付けられるテキスト

大学入試で求められる英語力の完成を目的としています。

文法=高3以上 英単語=4,500語レベル

B5判/2色刷・184頁 1,000円◆

[付属教材] WORKBOOK 550円◆/リスニングCD 1,500円◆

[指導書] 3,780円◆ <指導用CD・CD-ROM付>

Level 1 主対象 中1~中3 1,000円◆
発展的言語材料, 多様な読解教材を収録した
検定教科書補完テキスト。

Level 2 主対象 中3~高1 1,000円◆
高校英語への橋渡しのための表現と読解のテキスト

*表示価格は税込定価 ◆印は学校納入価格

三省堂高校英語教育 2013年 夏号

- 発行 ————— 2013年6月20日 定価100円(本体95円)
- 編集・発行人 ——— 北口克彦
- 発行所 ————— 株式会社三省堂 ●ホームページ <http://tb.sanseido.co.jp/english/>
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話(03)3230-9421(編集) 振替 00160-5-54300
- イラスト ————— 只見 優佳(ただみ ゆか)
- 表紙デザイン ——— 株式会社キャデック
- 印刷 ————— 三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9 電話(042)645-6111(代)